Feb. 1899
no. 481

明治三十二年二月十日

女學雜誌

第四百八十一號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第四百八十一號目次

◎社說
淺井先生の日常
曠野の一人ずまい

◎家庭
花園隨筆（若松女史）
兒童の宗教學升心
同兒惻隱の心の發達
同兒描畫のはじめ及進歩の狀態
同兒が人を好く標準
一兒の氣象なるもの
料理さし圖（河井隱村）

◎史傳
日本武尊（古事記の由來）（有美）

◎講義
本邦救濟の要旨（勝井某八郎）

◎雜錄
紀元節の一生面（高陵生）
註釋選八十柱抄（八溟招泉）

◎隨感
夜半母のおもひ

◎大磯だより
梅さ松

社告

本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、家庭の部は改善に細まるべき事情を主として、其他、文學、史傳、世俗等の記綴に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に關する論說學見を陳述し大に世上君子に問はんとするの旨とす。

單に十日發行の分、又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるるものあらば其の諸めに應ずべし

◉女學雜誌定價表◉

前金	壹冊定價	拾錢	（內國無郵稅）
	半年分定價	壹圓拾錢	
	一年分定價	貳圓拾錢	
	代金は總て前金にて御注文ありたし前金切れの節は其旨御通知いたすべし		
廣告料	一行（廿四字詰）一回		前金拾錢
	同	五回以上	一割引
	同	十回以上	二割引
送金	送金は東京郵便局に宛て小爲替にて送らるべし、郵券代用の人は必ず一割增にて計算せられたし		

明治三十二年二月十日印刷
明治三十二年二月十日發行

發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　伯川孫市
東京府北豐島郡巢鴨村宮下百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（出張所本局十九番）

社告

女學雜誌前金定價改正の事

女學雜誌前金定價は。上段の表、記載の如く相定め來り候處ろ前金、後金、混雜いたし。受取計算の節、往々行違となり、御手數も尠からず。弊社に於ても、往々御氣の毒いたし候事、殘念の至に付。今後は、前金頂戴の節、上表記載の如く（一年二回即ち一冊八錢三厘餘の割にて）計算いたし、後金は惣て、一冊十錢の割にて、計算可仕事に、一定候間。不惡思召被下度候。右御斷り申上度謹言

但し右新規則は來る三月より實行可仕に付。前金滯の御方は、二月中に御拂込被下、一時御清算被成下候はゞ仕合と存候

明治三十二年二月
女學雜誌社會計

女學雜誌

明治三十二年二月十四日發兌

第四百八拾一號

社説

海舟先生の日常（上）

◎氷川邊に行つて車屋などに其邸を聞くと、『勝樣』ですか、勝樣はあれをコウ曲つてト、樣づけにして敎へてくれる。門を這入つて十四五間の石だゝみの上を歩き乍ら左右の黒塀を見ると、所ろ〴〵ツギもあり、繕ろひもあり、少こし奇しげなる所もあり、余り立派では無いが、南をうけて日當りはよく、清閑にして自づと氣がセイ〳〵して、當世流の家に行つた時と妙に心持が違ふ。玄關に來て見れば、障子がチヤンと締まつて人の聲も無いから、初めから大聲に音訪つても中々聞えない。ヤツトの事で、極奥の方から人足が仕て、近くなつて女の聲で返辭があつて、夫から靜かに障子が開くのが定りである。某と云つて取次を請へば、障子を開けたまゝで向ふへ行く、其の正面に衝立があつて、

坦易其心胸。眞率其咲語。疎野其禮數。簡少其交遊。

の語が見へる。中々、返辭が無いから横を見ると、古けた籐の椅子があるから、之に腰でも掛けて待たふとすると、何だか潰れそふに思はれるから、すぐ腰を上げて、立つたまゝで待つて居ると、先に取次がれた女中か、（もし其女中が先生のお附の女中でなければ、今度は）先生のお附の女中が出て來られて、いんぎんに「此方へお通り下されませ」と案内される、之は幾遍上つても千遍一律で、少しも變りがない。

◎上つて、チヨイと廊下を通ると、十二疊の客間と、六疊の間の列んだのがある。之は本座敷で、椅子、テーブルが整然と調つて居る。床には、河村淸雄氏筆、雲龍天に昇る壯大の油畫があり、上には、大久保一翁、山岡鐵舟二氏の肖像が懸つて居る、此の座敷の奥に六疊の小間があつて、「海舟書屋」と云ふ佐久間象山筆の額が廿余年來依然としてある。之は先

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生の元の書齋で、大西郷でも、大久保甲東でも、皆なコヽでお話しをした中々歴史的の場所である。然し、此等の坐敷を右手に見乍ら、御導びかれて四五間の長廊下を行くと、茲に六疊と八疊の二間が南に開き、北に土藏を置き、其此方に三疊の茶室がある所へ出る。此の一と構が、近年、海舟先生の日夜坐臥せられたる所ろである。

◎六疊は奥にあつて、八疊が入口にあるから、先づ八疊の坐敷に這入ると、沈々として幽邃の氣襲ひ來り、我が足音すら聞ゆるよふなる心持がする。伏間がいつも立きつてあるが、其の一枚だけ開けてあつて、二枚屏風で其の外を圍ふて居る。此處から、六疊の間に通つて、先生の前に出るのである。

◎六疊の間の南は障子椽側。東は前に申したる伏間で、八疊に續く。北は三尺の出入口、一間の壁。西は上に袋戸棚、下に障子をたてゝ、其中に本箱を列べ、其の隅二尺ほどは開けて夏は風を入れるよふになつて居る。此の六疊の間の西側に長さ四尺の布團を敷き、先生其上に足倉かき、前に小布團をかけ、右に六枚折の障子屏風（夏はまた簾入り）を建てゝ、必要の書類、手帳を置き小き鉢に水又は湯を入れたるに蓋をしたると、砥石と古風の烟草盆を置き、此の烟草盆の引出に色々の小道具を入れてある。其中に必らず、鋭利のナイフがあるが、之を砥石でとぎ、自分で、指や、頭の邊を切つて、屢ば悪血を取られるのである。先生の足倉をかいて此方に向つて居らるゝ前に、小さき火鉢を置き、厚紙の火蓋がしてある。夏でも此の通りであるが、但だ、夏は其傍らに漆器の蠅取器械がありて、ギイ〳〵と廻つて居る。蠅が砂糖に迷つて甜めて居る中に、段々と奥へ乗せてゆかれ、再た〳〵出て來られぬ仕掛は、隨分人生問題の可笑しな話の種になつたのである。北側に一間の壁があると前に言ふたが、コヽに先生愛藏の幅をかわる〴〵掛けるので、短きは二週間目、長きは一二ケ月目に大抵、掛替へられるが、近年尤とも長く掛かつて居つたのが、西行の書で、其次は宮本武藏の密書であつた。其下に、經机があつて、經机の上に更に一つの小机が乗つて居る。此の間隙と、其の上とに、當座の書付、書状か乗つて居り、之に必らず、小ヨリが十數本添ふて居る。此小ヨリが、先生一生の規律で、何本の手紙と書付とが、次第〳〵に此の小ヨリに縛られたか知れぬであらふ。其の下に小文庫があつて此に

當座の機密の書付が這入つて居る。其の横に本箱があり、本箱の上にも書物が乘つて居るが、多年、いつも〳〵來客の目に留まるは、祖師傳三冊である。六疊の間が斯樣になつて居るとゆへ、客が四人になれば、部屋一パイである。西側、即はち先生の坐の上にいつも〳〵掛つて居るのが、曉天鳴鳥の圖で、濃朱の板に、漆で大膽に書き付けたる筆力は驚くべき出來である。矢張、河村清雄氏の作で、同氏は小さい時から先生のお世話を受けられた方である。

◎毎々お尋ねするものには、最早や先生得意の大喝もなきとゆへ、六疊の間に通ると鄭寧の御挨拶があり、茶が二度出て菓子が出て、其あとから、コヒーが出る。之は、夏も冬も、年々誰に對しても同樣である。時刻になれば、御膳が出る。御膳は、一汁一菜で、之も多年少しも變らぬ。お八ツになれば、又何か出る。何時上つても、何年上つても、同じとで、先生の座わり工合から、御馳走から、何から何迄、十年一日の如き調子である。

◎初めて來訪するものは、大抵は是非一度、一喝を蒙むるのが例である。其の喝に硬軟、緩急あつて、相手次第に自然に

調が變るようであるが、激烈なるときは、禪僧の喝の能く及ぶ所にあらず、猛虎一聲とでも言わふか、夫は〳〵ひどい見幕である。或人の如きは、逃げ出して、ブル〳〵震へて、再たび前に出ることが出來なかつたと云ふとである。尤も軟かき時は、丸で、調子の變つた、とぼけ切つたる挨拶で、總べて相手の氣を顚倒させて仕舞うようなる應接である。然し、一見肺腑を衝く修練を熟して居られるから、至誠眞面目の人物、もしくは朴質敦厚の質の人に對しては、決して左樣のカラカヒもなく、最初から眞面目の應接が初まるようである。然し乍ら、多年幾千万の人に接し、就中、殺氣、覇氣に滿ちたる人々に幾度か襲撃せられたる間に練磨されしとゆへ、初對面の人に對して一と度び之を試むると云ふは、寧ろ先生のクセとなつて居るほどに熟して居つたらしい。何等かの活手段によつて向ふの氣を一轉せしめ、其の剎那に相手を赤裸々にして、其の眞相を見て仕舞ふと云ふようなる工夫は、寧ろ先生多年の逆境から、其の第二の天性となつて居つたらしい。夫ゆえ、晩年、慈悲相の發揮された時でも、此の惡戯手段の機鋒は屢ば人を驚ろかせたようである。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎大抵の人は是非一度位ひ、氷川を尋ねる。變り者、途方にくれたる者は、是非此處を尋ねる。一大野心あるものは、先づ之を試みんとして尋ねる。商人の尤とも誠實にして手堅き人、又は古風の律義な人などは、多分此處より外には餘りゆくまい。政黨員、新聞屋、書生、軍人、一藝一能の士、寄附金を乞ふもの、壯士、遊び人などの行くとは普ねく人の知る所であるが、其外に、舊幕府の人、其の落ぶれたる人、舊大名と其家令などは無論の事で、田舍から尋り親しく出入するものが數千人に超える相な。而も、名の知られぬ有力の人々が中々出入するが、此等は迚も今の權門權家に膝を屈せぬ族である。此等の人の生國住所、職業は、知らぬ間に聞撰れ、先生の手帳と其の分䧺地圖との中に書き込まれて仕舞う。新聞雜誌も大抵は來て居るが、先生は輙と、此等を讀みらせぬ調子で居て、一々讀まれこ居る。然るに、其の話はトンチンカンで、其の耳は遠よふであり、大抵の話しの受答が要領を得ぬゆへ、凡その人は先生も亦た老ひたりと速了し、喋々として今の政界の事などを談ずるのが癖である。中には、田舍から出て來て、田舍の事を無暗に辯ずるものがあるが、既に

四 先生の調査を經たと、もしくは、先生の影からの助力で成立つたることなどを、恥かし氣もなく辯じつゝける田舍紳士などがあつたが、其の金クサリの光るよりも、傍聽する吾等の顔の赤くなつたとも屢ばある。總べて、此樣な風にして、出入の人から悉とく事實を吸ひ取り、其上、新刊小說は大抵よみ盡し、其他手あたり放題に讀んで、記憶は又無類なり、時としては飛乘りの車に乘つて所々に探檢される。尚くも、天下の事情に通ずる丈けの事は、のこらず工夫して、一日も老を知らざる爲躰なりしゆへ、常に時勢に先んじて、機に後れると云ふとのなかつたは、無論の事と思はれる。

荒野の一人ずまい

知友某君一日突如來り談じて曰く、余は不日世界漫遊の途に上らんとす、從來の征客大抵其の外狀を觀て內面を識らず、余は寧ろ其の裏面よりして眞相を視んと欲する也、故に單身一錢を蓄へず、到る處筋骨を勞して生計せん、余が彫刻の技術も亦た用ゆるとなけんと。余問ふて曰く、先

ぅ、何處に向つて發足せらるゝか。君答へて曰く、支那を最初とせん、十年にして全世界を周遊すれば可なりと。則はち、審らかに其の方案を聞き、憮然として歎じて曰く、試みに君に一事を問はん、之れ冒險にあらざる乎と。君曰く、何の險か之れ有ん、是れ尤とも平安の途なり、余曾て北海道荒蕪の地に居住し、二度び羆熊に會ひ、數度び狼に圍まれ、其の御し易きを知れり、烈寒酷暑つねに身軀を暴らして其の淩ぎ易きを知れり、幾度か饑渇に瀕して而して飲食の得易きを知れり、惟ふに天下何の處か自然の產物なきとあらん、之を食はば可ならんのみ、猛獸もと狃れ易し惡虫防ぐに難からんや、陸は歩すべきのみ、海は浮ぶべきのみと。余問ふて曰く、如何にして支那に渡んとするやと。君答へて曰く、一小舟に托せんのみ。余歎じて曰く豈に之れ危ふからずや。君色然として曰く、何ぞ危うしと言ふや、波濤に一任して苟くも逆らわざるに何の危ふきとかある、晴なんには水中に釣すべし、雨ふらんには天水を蓄はふべし、若し知らざるの島嶼に打上られなば、則はち玆に研究せんのみ、旣に世界に漫遊せんとするに、何の漂流の地か之れ無用の地あらんと。余深く覺る所あり、遂に之に賛す。後、飄然出發し、暫らく行く所を知らず。忽まち播州の人耕雲散士より書あり。彼の某君、途に散士を過ぎり、其の日記を托す。散士、之を增補して一小說となし、余に介して之を公にし、些さか青年有爲の士に示さんとすと云ふ。惟ふに、此書を讀むもの、孰か其の堅忍不拔、大膽不敵にして、抱負と操守との純潔且つ壯大なるに驚歎せざらんや。嗚呼、某の如き、天下稀有の資なり、年歯僅かに二十又五、而も其經歷すでに白頭翁をして愧死せしむるに足り、其の秀拔せる彫刻の技術は現代多く得易からざるの能たり、而して倘ほ自安せず、更に自から磨勵すると十年を期す。皇天、渠の上に祝福を下し、其の行途に平安を賜ひ、他日身心清健にして恙なく歸朝せば、吾邦家同胞の之に益せらるると幾何ぞ。感謝す、吾國の前途は、如斯き青年あるによつて有望なるとを。

則ち、左に其の第十二篇一章を抄出し、先つ試みに本誌の讀者に見すと云ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日に幾度となく。鏡ならぬ玻璃の裏へ黒紙貼りたるに。色男然と見たくもなき自分の顔を。様々の容して映しては自分の外に笑ふ人も怒る人も泣く人もありと。四つ五つの小供のする様な眞似して心を慰めしは。未だ柳枝に人々の居たる時の事なれど。不思議や皆々に振り棄られて。全く獨法師となりたる其日よりは。原野内にありと有らゆるもの。皆我知己の如く感ぜられて。始めの程はどちらかと云へば餘り氣持善からざりしも萎みし木の葉の散りたる頃より。夜毎の様に曉前になれば。我小屋の上に。高く伸びたる大樹の枝に怪しげに鳴く。何とは知れぬ鳥の聲にあれ。草々の霜枯れてよりは。取分け繁く徘徊する様に目立つ四足の中にて。一番執念深き狼が。隠れ遊ひさまよ出逢たる日の。夜も深更になれば必ず茅屋の近邊に來りて。三十分以上二時間計りも。引續きて迂鳴る物凄き聲にあれ。夏の中、元氣よく叢にて我等を驚かしたる野鼠が。霜の為めに隠宅を構はるゝに從ひ。我が茅屋を居殿とも思ひたるにや。追々と集りたる百以上のものが晝夜の差別なく彼方此方に群れつ亂れつ。果ては我が躰の背胸となく。縱横無盡に這ひ廻のみか。頭髪や手足の指を啣へて引くあれ

ば。肩に止まりて類べたをけろり〳〵と舐める如きも。殊更に我を慰めん為に來て居かの様に覺えて。其時の心の中は。人の居なくなりて。却りて多くの友を得たるが如く。何の淋しき事もなければ。恐ろしき事もなく。悲しき事もなく。愉快に日日を送りて。一月餘りは何時しか過ぎ去りたりしが。愧かしや自分ながら驚く計り。厭性なる我は餘りの太平無事に疲勞はて。時々豪快なる事。遭つて見たき念の起り。日日に伐りなす大木の倒れる刹那に。天地を震動させる様な轟きするも。雪の朝モナイ川に飛込んで。游泳する其身躰の顫へ上る程冷たきも。初めこそ愉快に心地好くも思ひたれ。何時まで經ても相も變らぬこと計りには厭き果てゝ。何れも是れも心に満足と云ふもの與ふるものなくなりたるに。扨て如何にせば是はと云ふ程面白き事に出逢ふらんと。色々様々に。考へ〳〵考へ抜きたる末。案じ出たる明案は當原野の獸王と名づくる。羆と戯るゝことにてありき。最初原野に入り込む時。人に怪しまれながら函館より持ち來りて。當座には何處に行く時も手放さゞりし武器。意外の事より武器なくして。猛獸に勝つ事を悟りしよりは。無用の長

物の如く感じて。邪魔になるまゝ見るも蝿止さく小屋の隅に突き遣り置きたる銃は。雨漏の爲に鐵蝕れして。物の役に立たずなり。大刀は望しがりたる人に早やく與へ。脇差は叢中を潜る時。何時とは知らず打落たる。今は武器とて何一つ持たねど敢て獵すると云ふ積もりにあらねば。其持たぬ所ろこそ。羆と戯るゝに屈竟危氣なしと。方外にも無鐵砲なることと思ひ付きては猶豫すること能はず。翌朝の天氣麗かなるを幸いに。此節の食物になし居たる天然葡萄を腹一杯詰め込みて。若しもの用意に長さ五寸二分のマサカリを腰に帶びて。平常より羆多かるべしと見込置きたる東南指して進みぬ。今は夏と變りて。六七尺に伸びし隈笹一面に生ひ茂る外。草も木も葉は皆落ちて。枝計りなるに見霽し好く遙か東の大嶽山も。西北なる假手山も薄淡く見渡さるゝに。方角を取るに便利なるは余禄として。幾度も失敗し來りたるに油斷の出來ず。絶えず磁石に依りて方角を定めては。目標を作り。路ならぬ路に小川沼等のあるも構はず。一直線に通り越して。路の側なる木に捲き付きたる。葡萄蔓に結びたる實の。黒く佳さうなるを見ては。撮み食ひつゝ羆の姿の見えはせぬかと。四方に眼を配りつゝ。半里余りも進みし頃。十數丈も高く盛り上りたる丘の麓に來りぬ。我は高臺に登るの氣進まぬまゝに。横切らんかとも思ひしかど。若しも方向を取違へて歸路を失ふ様なる事ありては大變なりと。崖の様になりし所を。木の根や笹を力に攀ち上りて見れば土地は平坦にして繁れる笹は三尺許り。平原地の廻り丈以上の樹が。一段歩に一本内外に生へあるに引かへて。廻り三尺計りの木が。一段三十本内外の割に生へてありたるは。地味に委しからぬ予も。平原野と大差あるを悟りたり。我は笹の短かくて平原野よりは歩み易きに。尚も十町餘りも進みし時。是は意外々々。北海道の原野を未だ踏まぬ先に。想像せし通り。數百町歩あらんと思ふ間に。木とては一本もなき。茅交の笹も長さ二尺位なる野邊に偶と出でける。思ひも掛けぬ空漠たる原に出し事とて。茂林に抑制せられたる胸中には。何んとも言へぬ感じを與へて。突ッ立ちしまゝ。きよろり／＼と四方を眺め居る時しも。遙か西南の方より。背を現はして篠原を踏み分けて出で來るものは。お誂向の羆なるにぞ。我は飛立つ計り嬉しく。直様進み行かんと爲せしかど。若し逃げられては。折角の辛

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

勢も水の泡と些つとの響もさせず。凝乎として視て居る中熊は僅に七八間離れたる樹手を打ち過ぎんとするにぞ。今は堪らず「老爺々々」と絶叫すれば熊は其意外なるにや驚きけん突立ッたる胴の長さ六尺餘りもあるは。六七歳になりたるならん。我の姿を見るや否や例の如く爪磨ぎ澄したる盃大の兩手を擴げて牙を怒らし。一躍に我が躰を引き裂かんとせり。爰に我の望み叶ひて愈〻壯快なる遊戯場とはなりぬ。我は熊の勢に應じて。自分も又兩手を擴げ凝乎と睨んで大喝すれば。熊は我魂膽にや驚しけん。どし〳〵と二足三足逡巡りで。又も猛り狂ふて飛び來るにぞ。我も又熊のする如くなしつゝ。彼か疾視んで吠鳴れば又々引退く面白さ。

斯くすること七八度にして。熊は愈〻狂ひ來れども。我は既に氣力疲れて及ばざりしことを知りつゝ。携へしマサカリを拔き取りて逆手になしつゝ。熊の咽喉目がけて突かんとすれば。彼は是を見るや否や。夫は〳〵破竹の如く飛び來りて。何んのかんのと云ふ間もなく。我の躰を組み伏せぬ。其一刹那。我は幸に熊の胴躰に抱き附きたりしとは言へ。餘りの火急さに肝腎のマサカリを打ち落したる情なさ。憫れ〳〵予の小さなる躰は。熊の四足の間に狹まれし。逃るゝ事もあら悲しや。命は恰も風前の燈火。唯熊の首短かく。手足太く短くして。外方へは自由に利けど。腹の方へは自由ならずして。恐ろしき爪も牙も抱き附かれたるものを。害する事の出來ざるは。我に取つて此上なき好都合なりしとは云へ。彼は我を害する事の出來ぬ苦悶さに。助勢手を受けんとても思ひしか。驀地に篠原を驅り廻る爲めに。我軀の何處此處の嫌ひなく磨り廻はさるゝ苦しさ痛さ。目の玉より火の出る樣なるにつけ。吁馬鹿な事を爲てけりと。後悔するより外もなく。打角任務の爲に。己を捨てゝ獨り踏殘りし甲斐もなく。一朝の輕忽より水泡に消ゆるなど。咽せ返る涙に瀧をなすなれど。熊の足を漂はす丈けの洪水ともならねば。彼は仍も狂ひ廻りて。さも恐ろしき山坂に來りし途端に。土の壞れて左の前足を辷らし。狂ひ切りし勢に蹈止むる力のなかりけん。頭顛倒と岩角に打ち當りつゝ落ちて行く絶躰絶命。

八

身躰の冷かさを覺ゆるに氣の附きて。目を開けは我は死したる熊に確と抱き附きたるまゝ。谷底に落ちてありぬ。仰ぎ見れは數十仭もあるなる絶壁の下。斯る所に落ちし事とて。熊

は肉も骨も砕けて死んで居れども。我は何處に差したる傷を受けしと云ふ事もなき不思議さ。然ども我が羆の上に乘りて居るを見れば我が躰の輕くして羆遙かに重く、落つる時に重き物下になる道理で、岩角に打ち當る時も地に落ちたる時も、重き羆は大傷を受けて命を失ひしに引かへて我は直接に折ちあたらざりしのみならず。毛柔かき羆の腹にあたりたる爲めに、命に別條なかりしなるべし。吁我は羆の爲めに十中の八九分までは命を失うべかりしを山坂ありしに依りて恐ろしき爪牙を免かれ。崖に落て身躰の粉碎になるべき所を、羆のありしに依りて命を助かりたりと思へば、難有つて涙も出ず。暫時默して居たりしが、空腹を感じ出したるに。袋に入て首に掛けたるマッチのあるを幸ひに。羆の肉を喰はんと思ひしかど。大恩ある彼の肉を養ふは、何となく慘たらしき感じのせられて、葬つて遣るこそ然るべしと。飢を忍びつゝ其日は其まゝに立ち歸り。翌朝鋤鎌を用意して、再び昨日の所に至り土葬したる上に筵旗を立てゝ墓標とはなしぬ。

鷓鴣叫二煎茶一　與レ茶元不レ識

家庭

花園隨筆

紫琴女史

◎兒童の英雄崇拜心

吾家の小英雄、今は五歳四ヶ月なるが。彼は四歳弱の頃、既にさま〳〵なる談話中より、自ら義經を撰擇して、頻りに義經は、好なり〳〵といひ居れりき。何故に好きかと聞けば、或時はおのが持てる繪本中の義經の顏を指して、顏が好きなるゆゑと、稀にはいひたる事あれど、槪しての答は、強き故といふにありき。其頃よりぞ、義經のはなしは、幾度となく繰返す可く迫られて、我はほと〳〵其煩はしさに、堪へ得ざる程なりき。果は余りの煩はしさに、何とかして、煩はしてふ心を自制せむものとて、一種の工夫を思ひ付き、夫より後は義經談を、請求せらるゝ度每に我も亦其問に、些興味を併せ取る事とせり。其方法は、義經談をする每に我も覺束なき、歷史の記憶をたどりつゝ、さま〳〵の方面より、義經を說く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事には、改めしなり。されど彼は、他の義經を聞くを好まず。單に蝦夷越の義經を聞くを以て、何よりの快事となせるさまなりき。此に於てか、我折角の、工夫も頓と用を爲さず。再たび一年有余の久しき間、同一の義經談を繰返すの、止むなき、運命には陷りしなり。されど彼が蝦夷越好きの氣焔も、少しは衰へたるやうにもあり、且は齡も、一年は長けたるにいつも〳〵義經の一二事蹟を繰返せとの、請求にのみ應じ居るは、我が甚だ智恵なきに似たり。試に義經の、略傳を紹介し見ばやとて。夫迄は、斷續して、統一なかりし義經談を、更に傳記として、說き聞せしは、猶も四歲四ヶ月の時なりし其伏見の里より說き起して、衣川の自盡にまで及べるや、彼は忽ち反問せり。さらば義經は、賴朝に、負けて切腹したのかと、我は何心なくいへり。然り賴朝と、直接には戰はざるも、負けて死んだといふものなりと。彼は詞ひ終るを俟たず忽ちに聲を放つて泣き出せしが、訝しと見る我顏を、彼は睨掛けて、又更に、飛掛らむづ姿勢を示せり。されど我一睨の敵對がたさに、彼は再び、わあ〳〵と泣けるのみ。仔細を聞けば義經が賴朝に、負けしといひしが氣に入らぬとての事なりけり。是に至りて、我は始めて、彼が最初好くといへりし義經は、崇拜の度にまで、進み居たりしものなるを覺知して彼が崇拜の英雄を傷けむとの、如何にも〳〵憐れさに。或は蝦夷に入りて、王となりしともいふと附加したり。されど彼は尙ほ啼き止まず。ともいふでは、分らぬ、王になつたのでなければいやだと云張るにぞ、遂に夫れに確定して、切腹といふ說は、全く跡形もなき誤りなりとの正誤を呈して、漸くに、彼が啼きは靜まれり。是兒童にも、英雄崇拜の心ある、一番據には非ざるか。

因にいふ、少時の後、我は重ねて、蝦夷に入りたる後の義經を說き、今もアイヌといふ人種は神として義經を禮拜せりといひたるに、彼は余りの驚喜甚しければにや、却て是は容易く信じ得ず。其は我を、喜ばせむとていふに非ずやと再三疑問したりしが、日を經て漸く信じ得たるものと見え其後は義經を、稱讚する度每に、其終に神となれるを、大聲にいひ出つ、揚々として、さも誇り顏なるをかし。

◎同兒惻隱の心の發現期

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

同じく此兒の、二歳九ヶ月なりし時なりき。彼日清戰爭圖解中、樋口大尉が、左手に嬰兒を抱き、右手に劍を揮ひて、支那兵と戰へる個所に就き、繪畫に照して、當時の事情を說明したりしに。彼は獨泣き聲になりて、此兒のお母さんは、どうしたのと問へり。依て我は、お母さんは、いくさで何處へか逃げて行て、子供ばかりが殘れるを、大尉の憐みて、抱き上げたるのなりといひたるに、彼は何の聲なくして、忽ちに、ほろり／＼と淚を墜せり。余りの早熟訝かしさに、まさかとは思へども、扨は此兒を可愛さうと、思ひてかと聞きたるに、彼は然りと默首しけるまゝ、良久くは、悲愴の感に打たれたるものゝ如く、容易くは、次の圖解に移り得ざりき。依て我は此兒が、餘りに神經質なるを危ぶみ、其後は凡て悲哀の感を刺衝すべきの談話を爲さず。力めて無邪氣に、快濶なる談話をのみ撰み居るを以て、今に至るも、再經驗の機會を得ず。されど當時の狀態に照せば、確に悲哀の同情を寄せたるものなるを疑はざるなり。

◎同兒揮毫のはじめ、及進歩の狀態

同兒か二歳三ヶ月の時なりき。偶然筆をとりて、襖に不恰好なる丁字形のもの三個を畫けり。意思ありて筆を動かしたるものか、意なくして、かゝる形をなせるものか、甚判明ならざるを以て、試に夫れは何かと尋ねたるに、金鎚なりといふ扨は意ありて畫きたるものと、見直せば、なるほど金鎚と見えぬにもあらず。只あまりに、頭の曲りたるもあり、柄の長過たるもあれど、丁字にしては、縱線の、少しく横に寄りたるにぞ、金鎚なりとは知らるゝなり。夫より廿日程を經て、彼は又障子に、不規則なる輪數個を畫き、其中に黑點を亂打せり。輪は大なるあり、小なるあり、瓢に類するもの、瓜に似たるもの、何れも歪みて、一定の形なし。但一線より成立てるものゝ曲りて、首尾の接續せるにぞ、先づは輪と見做さるゝ迄なり。點は五六七の數も各個各別にて、或は一隅に重なり合ひ、或は飛び／＼離れ／＼になれるもありて、一定の位置は保たねど、悉く輪の中に收められ、圈外には一個の點を見ず。因て是れ何をか、意想せるものならむと思ひ、聞けば人の顏なりといふ。輪は顏の輪廓にして、點は眉目鼻口を代表せるものなるべし。されど其拙なさは、前の金鎚の比に

非ず。顔と聞けば、顔を意想したるものとは推せらるゝ迄にて形に就けば、一も顔と思はしきものを認めず。されど此時にぞ、人の顔を畫て見たしとの念を萠し初めたるものと思ひ、試に簡略なる顔を畫き與て、模倣すべきや如何を驗したれど一向何の變動を見ず。依然不規則なる點を、亂打するのみなりき。其後二ヶ月ほどは、全く筆を忘れたるものゝ如く、喜びもせざりしが、不圖何に感じてか、頻りに兵隊を畫け〳〵といひ出したり。尤も日清戰爭の繪本を好みて、其前より絶えず其を玩び居たり、かくて間がな隙がな、我に兵士の形を畫かせて、其を熟視し居たる樣子なりしが、二歳七ヶ月に至り、再び筆を執り初めたり。此度は前の如く、偶然畫くといふに非ず、畫をかくからとて、紙と筆をこひ求めたるが此の時は既に眉目の位置を定むるの智惠生じたるものと見えて。前の所定めぬ黒點は、進んで幾個の線となり、鼻は縦に、尖は直角をなし。眉目口は、横線の夫れらしきが、不體裁ながらも、所を得て、漸く顔の形をなしたるのみならず。帽子を冠りて、洋服姿の立ちたるが、兎も角も全體を畫かれたり。其後追々に、髭も出來、勳章も付き、洋刀も挿され、一個宛の線のみなりし眼と口は、二線より成立つやうになりし頃には、兵士と將校を、帽子と服にて書き分るやうになり、兵士は髭が除かれて、髭は將校の專有物と限られたりき。而して兵士の嗜好は、漸く轉じて、昔の甲冑武者となり、例の義經樣ぞ、いつも〳〵畫かれ玉ふ。彼が義經樣に於る惟一の目標は、さゝりんどうの紋にして、這は何れの時にも、遺忘せられたる事はなし。其今日に至る最後の進化は、二皮眼といふ事を畫き覺えしと、一個の直角のみなりし鼻端の、少しは圓み付きて、小鼻といふもの出來上りしとの二事なり。されど鼻の穴は、未だ忘られつゝあるなり花鳥に對しては、毫も畫心を動かさず。器物も最初に、金槌を摸したるのみ。馬は大將の畫に必要なるより、用ひらるれど、彼の嗜好は、人物の中にも、今昔の武人にのみ限られたり。

文字に對しては、何の嗜好をも有せず。只大日本　天皇陛下と、義經、おのが姓名の外に、家族の名二三を書き得るのみ。文字といふものに關しては、未だ何の趣味をも、解せざるなり。

以上は字畫とも、教授的、注入の方針を取りたる事なし。只

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼よりの要求に任せて、手本を書き與へたる迄なれば、彼が自然の進化の形迹なり。

◎同兒が人を好く標準

同兒が人を好くといふには、二個の標準あり。一はおのれに待遇宜しき人。一はおのが好く形に、容貌の出來たる人なり。其待遇の宜しきといふは、氣永く遊び相手になり呉るゝ人か、さらずば玩具を呉れる人なり。容貌にて好くといふは、脊高く顔長く、立派なる髭ある人なり。婦人は槪して好かじといへど、是も眼鼻だち整ひ、大人の眼にも、美人と見ゆる夫れは矢張好きとぞいふなる。

例外は、容貌の醜きも、待遇のよき人か、おのれに頓着し呉れずとも、躰格調ひ、容貌の立派なる人かにて、此二標準を外れたる事なし。

但小供同士の間にありては然らず。四隣の如何にも依るべけれど、先方が兒童なる限り、多少の年長者に對しても、貰ふよりは、與ふるを以て、非常の愉快とせるものゝ如く、おのが最愛の玩具を割愛して惜まず。是一は、遊び相手を得まほしき、運動費をも含めるらし。而して能く遊んで呉れるといふ友の、容貌の醜きよりは、假令遊んで呉れざる友も、容貌の美しきは、此方より睦み、慕ふさまなれば、小供に對するの好物は、一に容貌の美醜如何にあるが如し。

◎一兒の氣樂なる考案

我近傍に小さき池あり。夏は群兒の、是に遊泳するもの甚だ多し。去年の夏、我は隣家の男兒の、其當時五歳二月といふが、此所に足を浸さむとするを見て、危ふさの思ひに堪へず、或時告ぐるに、溺るれば、死ぬといふ事を以てす。是れ一つは、我兒の傍聽せるを以て、是を未前に、戒め置かむと思へばなり。彼兒我兒と、顔見合せて笑ふて曰く、何の怖き事があらうぞ。若しも池へはまつたならば、大人になるまで池に居て、大きくなつたら、出やうぬと。如何に兒童の考案の、無邪氣なるかを察し見よ。是を思へば、危き遊びをしたりとて、漫りに叱るべきにあらず、口に是を知せむは、千度繰返しても其効なく。眼に見せては、一度に會得せしむるてふ、舊きよりの敎への、今更にて、覺えずもほゝゑまれし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

料理と國民

櫻井鷗村

◎明治の世となりて、諸事諸物に一大變化を來たし、西洋風日増に蠶食す。先づ山河自然の形態について見るに、鷄犬の聲稀に聞えたる桃源郷裡にも、滊笛の吹ゆる音、野人の耳に馴れ、岩走る溪河の水にも、鐵橋架せられ、灌木喬木鬱々として、人跡を絶ちける深山には、腹を穿ちて進む汽車あり。電柱は又山野を尺どりつゝ、縱横に亘る。箱根の溪間に、紡績會社の煉瓦建物あれば、琵琶湖の水、東山を蒲團着て臥たる姿に安閑たらしめず、其麓を穿ちて、京師に注ぐ。山河の變、其急なる事、風物既に三十年以前のものに非らざるや多し。去れども、此等文明の利器は、漸く、自然と調和して、景中のものとなれり、與津濱邊、波に洗はるゝ鐵路、須磨舞子、松の木の間の黑烟、景に添ふるに景を以てするやの思ひあり。

◎住家に就いて見れば、中等以下にても、洋服を着て、疊に坐すべき場合少からず、其以上の社會には、西洋造の客間あれど、便室は、依然日本風なり。此外、日常の衣、住に、著しき變化を生じたるが、扨て、食物にも大に昔と異なりたるものあるに至り、殊に都會地を以て甚だしとなす。天地も、衣食住も共に、西洋分子と日本分子が、半調和、半背離の有様にて、譬ふれば、西洋人と日本人と夫婦に成りたるが如く未だ相の子とまで進まぬ狀態なり。

◎諸物諸態の變化の、人の心身に及ぼせる影響は、論外として、今單に、食物の變化、國民の健康に幾許の利害を來たしたるかに就きて、少しく考ふべし。これ甚だ緊要なる問題にして、而して、人の多く等閑に附し易きものなればなり。

◎西洋の食養衞生論行はれて、御馳走といふ代りに、滋養といふ言流行し、牝牛、牡牛、豚の肉、盛に食膳に上り、數多き牛肉屋に、客足繁く、西洋料理屋なるもの、田舍にも開け單に西洋といひて、獨乙、佛蘭西、米國、英國、いづれともつかぬ料理を食はせ、而して又、日本料理にも侵入す。今日日本料理と稱するものも、必ずや、維新以前の調理法とは、少からぬ相違あるべし。茶漬御仕度といふ飯屋の料理に至つては、其變化殊に甚しく、古風なるもの、漸次に忘れられ、ヒ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

フステキまたはフライに、面桶飯は、いよ〳〵流行すべく、屋臺店のシチウ汁は、追々縁日にも出づるやうになるべし。牛乳、バター、咖啡、紅茶、ビール、葡萄酒など、僅か三十年前までの故人の知らぬ、今人の食用品なり。

◎夫れ食は身を成す。されば食物一たび變化すれば、人身に少からぬ變化を與ふべきや必せり。最も近き例を取れば、日本人の支那に行けば、油濃き支那料理の爲に、これに馴るゝまでは、身躰を傷ふといひ、西洋に行くものも、また然らん。また洋行がへりの人は、日ならずして、西洋人的の桃色の顔變じて、元の黄色に變ずるは、これ食物に變化あればなり。されば日本人が、近來、滋養と稱して、多く肉食するに至りて、彼等の健康に幾許の變化を來たせしかは、數を以て算すべからずと雖も、定めて、暗々裡に、少からざる影響を與へしなるべし。

◎國土を異にするに從つて、其食物にも、差あるべき筈なり同じ日本にても、西南の人は、鮓、うどんを好み、東北の人は、天麩羅、蕎麥を好むの違ひあるものを、況んや、洋の東西南北を別つによりて、其住民の食物に、著しき異りなからんや。等しく西洋料理と概稱すれども、獨逸と、英國との食品調理は、一に非ず。食品の差ある所以は、主として風土氣候に關す。故に國には其國に適當したる固有の料理法なくんばあらず。西洋人の滋養品は必ずしも、日本人の滋養品に非ず。されば安んぞ、他國人を以て、他國人の食品の濃薄を嘲るべけんや。

◎西洋人の食養衞生論は、悉く、日本人に當てはめらるべきものに非ず。日本人の食物は、これを西洋料理支那料理に比すれば、頗る稀薄にして、滋養に乏しきが如し。在來の日本食品なるものは、建國以來、幾變遷したる結果に相違なく、上古は盛んに肉食したるに、佛敎傳來以後、其用頓に廢れたりとの說なるが、然りとするも、西洋風の滋養品に欠けたる日本食は、千年百年と繼續し來り、人民は子々孫々相傳へて之を食するに宜しき胃臟を備へたり。然るに、一朝濃厚なる肉食を多用する時には、所謂滋養は却て、害を與ふることと尠なからざるものとなる事なきか。肉食今の如くに行なはれて、以來、日本人は、幾許の健康を增したりや。

◎肉食論者は、日本人の躰格の矮小微弱なるを以て、蔬食の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

罪に歸すと雖も、盛んに肉食する者は、果して健全なりや、彼等の子は、身幹躰力に幾分の強大を加へたるか。滋養に注意して、肉を食ふと多きものは、教育ある社會の人、及び中流以上の者なり、而して、不健康なるものは、彼等の間に最も多きに非ずや。これ何の故ぞや。

◎多肉食は、日本國の如き風土に住する人民に適したる食物なりや、これ未だ判斷を下すべからず、また今日肉食者の敢て健康を增加せざるとを以て、直に、其不適當なるを定むべからず、數百年試用の上には、日本人の遺傳的躰格に調和して、國民の健康を進むるに至るともあるべし。然れども、日本人の食物は、遂に西洋風に改良すべきものなるか。今時の人の身躰微弱なるは、果して、日本食の粗惡なるが故なるか、然らば、何故に維新以前の人は、今人よりも、多く健康なりしか。

◎西洋風の滋養食物說、行はれたる一方には、却て、人の身躰微弱となり、疾病の數も增加せる所以の理を考ふるに、畢竟、食物の雜駁となり、其調理法の亂れたるが爲めならずんばあらず。今日の事物の不調和なるとは、食物にまで及ぼし、

其不調和に甘んじて、日本とも西洋ともつかぬ食物を用ゐる中流以上の人は、身躰の組織まで、不調和ならしむるに至れり。勿論彼等の間に・古へのナショナル、ゲームたる擊劍、柔術、馬術等の躰育の急に廢れて、之に代るべきもの無きとは、彼等をして、微弱ならしめたる一大原因なりと雖も、躰軀を造る元素の食物に不調和あれば、微弱の害を來すべきは當然なり。故に今の國民の健康の不良なるを患るは、大に食物の不調和なりしとに注目せずんばあらず。

◎食は身を成す、身これが爲に成れば、身に伴ふ心も、亦、食の爲に大に感化せられずんばあらず、蔬食者の冷靜なる、肉食者の多情なる、歷々徵すべきの實證あり。禪僧と西洋人との情欲の多寡を見ても知るべし 日本人よりも、支那人、支那人よりも西洋人ぞ、情欲其度を進むるは、肉食の量に比例するもの丶如し。されば、日本人が、今後、いよ〳〵肉食を盛んにすれば、遊廓と畜妾とは、益々盛んなるべし。

◎而して特に今時の食物の亂れたるは、抑も人の精神の上に何如なる害を加へたらんか。維新以來、士氣日に振はざる所以も、また多少、食の亂雜なるに原因すると無からんや。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

史傳

日本武尊

（古英雄の典型）

無草庵有美

われ若し殿撰びする姫達の身に生れいでたりしならんには、景行の帝の代にいまし給へるといふ日本武尊をこそ、吾が夫にとらめ。希臘の神話にありと噂せらるる怪きヘラクルス、テシユウスなどにもいや増して面白く又慕はしきは、この尊なり。又むかし歐西の邦に士氣時代とぞ稱へて、華やかなる勳爵士の、くろがねの甲冑に、風に靡く鳥の毛飾り、磨ぎすましたる軍斧をかまへたるが、武者振り勇ましくたち勵みて優しき女人を妖魔の禍よりかくまひ護りしと聞けど、この尊の如き勇者は曾て現れざりけむ。後の世に陣頭腥きほとりに駒とゞめながら、青葉の愛笛を太刀の小脇にかい挿み、或は梅花一枝を箙に薫じて身を敵營に進めたる奢る平家の公達など、彷彿のうちに此の尊が影を寫しぬべし。花咲き花散りて二千年、春妙青麗の佳人今や野に多くして、伉儷を契るべき好配なく、徒に秋風枯葉に思を寄せて、蟠屈盡きざるの恨あり。世はつれなき荒男と女々しき優ものとにて充つ。新月ひとり其悽愴の光を逞ふして、瓦壁壞れ塔樓潰ゆる宛然古城の廢趾を見るに似たり。佳人あり、たゞ眞丈夫の是れなきを如何せむ。家貧して良妻を念思す。今の時に當りて古英雄の典型日本武を憶ふ、亦宜ならずや。何れの姫君か、かゝる男好しと言はせ給はぬものやある。

尊、身のたけ一丈。年十六にして熊襲の暴戾を鎭めんと西地に行くや、束ねたる美都良の髮を解て、肩のほとりに垂れ流し童女の姿を裝ひ宴室に入れば、人その男たるを知るものなし。魁帥川上梟帥その婦女たるを誤り思ひ、頻に容姿の美なるに溺れて、手を取り席を同くし杯を擧て相戲れ、又その蝦夷を征するや賊首島津神國津神等之を望拜し、「君の容貌を仰ぎ奉れば、人倫に秀で給り。神の御子には坐さゞるか」と云るとかや。其眉目秀麗にして花の顏よく人を惱殺せしむる者有しや思べし。これぞ丈夫たるの一大要件なれ。日本武尊や眞に

麗美の人なり

然れども、たゞその身の端麗に心を壞して、膽勇の之れに適

はざるは丈夫見のことに非ず。尊、温顔人に交れば一見處女の如しと雖ども、一たび怒りて敵に向ふや、さながら獅子の如く西戎を平げ東夷を征す。その梟帥を刺さんとして劍を抽くや、梟帥驚き啓して『日本武ノ皇子』の尊號を奉れるは、これ何等の痛快事ぞ。日本武や眞に、

●●●●●剛勇の人なり

麗美愛すべく剛勇讃すべし。されど徒らに匹夫の勇に驅られて、深思熟考よく機に臨み事に處するの明なくば、之を猪武者といふ。佳人の好逑するところはかゝる不明の狂漢に非ずして冷靜沈毅の大丈夫なり。尊の東夷を征せんとして先づ駿河に入るや、賊偽り降りて尊を野に導き、火をその周圍より放て之を殺さんと謀る。是に至りて、誰か其の事の思はざるに亂れて、周章狼狽よく爲すところを失せざる者あらん。されど我が尊は然らず、胸中自ら閑日月あるものゝ如く靜にその佩きなす叢雲劍をとりて、草を薙ぎ拔ひ燧石を鑽りて向ひ火を放ち、却て賊衆を燒く。是れ豈に良將楠の謀計あるものに非ずや。又その碓氷の嶺に至るや、吉備武彦を越の國に遣はし地形民情を視察せしめたるが如き、眞にこれ堂々たる政治家のことなり。是に至れば、日本武やまた實に

●●●●●智慮の人なり

美貌あり剛勇あり又智慮あるも、人もし之れに勝ち誇るの心あらば、遂に衆德を全ふする能はず、世間の嫌厭指彈を買ふに夫れ至らんかな。况んや佳美人の恩愛をや。人多くは之れによりて兇はれ之れによりて亡ぶ。故に不遜驕傲は猶ほ獅子身中の虫の如しといはんか。而して日本武や、此る醜慮の些かも其心に宿るあるなし眞に

●●●●●謙德の人なり

その西の方熊襲を平げて京に歸れるより、越て十二年、東夷また反して邊境を騷すこと一きりなり。是に於てか朝議乃ち征討の意あり。世の常の武者ならば、また此度の戰陣にも御命蒙りて二度の功名手柄に、花を滿朝に咲かせ香を末代に傳へんとぞはやるべきに、尊は曰く『臣則ち先に西征に勞せり是の役必す大碓の命の事ならん』と、自ら謙讓して東征の功を兄の尊に歸し奉らんとせり、たゞ兄大碓の命不肖にして之を辟け懼れたるより止むなく自ら其事に隨ふ。これ豈に眞丈夫のことならずとせんや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

中世紀の勳爵士が常に口にせるところは、手弱き女性と聖なる神の教會を保護せんといふにありしが、吾が尊も常に神を敬ふの心を絶たざりける。これぞ衆徳の泉源ならんかな。日本武尊や

敬神の人なり

尊の大命を拜して東征の行に上るや、特に道を神風の伊勢の五十鈴川上に枉げ、先づ神宮に詣でゝ武運の幸よからんを祈り、神託によりて叢雲ノ劔を佩きいで給ひ、その歸りて能褒野に至り病の回らすべからざるものあるを知るや、携ふるところの蝦夷の俘虜を神宮に獻じたるが如き、敬神の心うちに鬱勃たるに非ずんば、よくなす能はざるのことなりけらし。」而して尊また忠孝の志厚く、何處に行きいづくへ離るとも父の帝を思ふの心終始止む時なくその東征のこと終り、未だ帝に謁せざるに、早く既に毒氣にあたりて途に能褒野に薨ぜられんとするや、恨事止み難く沈呻苦惱に堪えず、侍臣武彦を遣りて則ち天皇に奏して曰く、『臣命を天朝に受け遠く東夷を征す。即ち神恩と王威とにより、反者罪に伏し荒神自ら調へり、是を以て甲を卷き戈を戢めて凱旋せり。然れども天命忽ち至り、隙駟停め難し。獨り曠野に臥して誰も語ることなし。豈に身の亡するを惜んや。唯天顏を拜せざるを悲むのみ』と、人の心あるもの誰かよく一讀して涙なきを得んや。かの正行が四條畷の戰に赴かんとして別れを吉野行宮に告げ奉るの時、唯僅にこの燻辭あるのみ。特に神恩をいふて恭しき敬神の心を示し、『豈に身の亡するを惜んや。唯天顏を拜せざるを悲むのみ』といふに至りては最早や口にするに忍びざるなり。日本武や眞に

忠孝の人なり

萬のことにいみじく武士のわざにも長けたればとて、戀好まざらんおのこはいとさうざうしく玉の盃に底なき心地ぞする。日本武尊もしよく忠によく孝に、よく敬によく謙に、よく智によく勇に、よく麗なるも、まことに色を好んで、纎弱助け少き女性に注ぐの熱愛これなからんには、未だ古英雄の典型と稱ふべからざらむ。かゝるやからはその心頑にして仁慈を解せず、たゞ怖れ畏るべきも、愛すべく敬すべく慕ふべきの人に非ず。されば歐西の勳爵士が女性の保護を以て、殆んど主一の修行とせるも理りなれや。この心なくば我れ姫

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

達の身に生れたればとて、尊を我が夫には撰むまじ。千軍萬馬といふにわらねど、事多き軍旅のなかにも、尊はこの難有き丈夫の御心を失ひ給はず、優しき弟橘姫を船にのせて、はる〴〵東國指して伴れゆき給ふ。日本武尊や眞に

情熱の人なり

その歸り途すがら、無類の勝いくさに、悦び狂ひ給ふの心もあらで、さきに我が妃を沈めたるほとりに來り、碓氷の坂にのぼれば、佇回逡巡馬進まず、身をなきものにして海神をなだめ皇軍のさちよかれよと祈りたる亡き妻を憶ふことしきりに、追懷最早や禁じ難く、嶺に登り三たび天を仰て『吾嬬者耶』とのり給ふ。かゝる忝き御心の尊にしわれば弟橘姫の慕ひしたひ戀に戀ひぬきて、之れにかづき參ひらせ、暴風起りて御船危きの日、身をなきものにして海中に沒し、海神の怒を和げて尊の命を購はんとせるも理りならずや。又その尾張に入るや、達の女宮簀姫をめでられしが、これを棄て去るに忍び給はず、滯留遂に月を踰え恩愛のほづな容易斷ち難かりしも、一たび近江の膽吹山に荒ぶる神ありと聞くや、せめては後の日の紀念にもと、東の間も離れずその身につけ給へる叢雲の一刀を宮簀姫に殘し、惜き別れを後にして蹶然起て難に赴き給ふ。この間儒夫の女々しきふるまい些かもその影をとゞめず、天晴れの御行かな。宮簀姫たるもの、悲んでしかも祝ふべきなれ。されば、尊や熱愛の人なれども、これによりて其責を忘れ給はで

狂へども惑はず

また此く情深き人の御常とて、憐みの御心またいとまめやかに、蝦夷の賊等尊の威に慄れて裘を褰げ面縛て罪に服するや、未だ開明の民ならざるに、沒りに鮮血を迸らして武に驕るを潔しとや思ぼさゞりけん、悉く其罪を免じ唯首師をあげ、俘とせるのみ。その博愛敵をいつくしむの御心、誠に基督教斯敎勳術士の行に恥ぢず。日本武尊や又眞に

慈仁の人なり

といひつべし。またそのうちに詩歌の思ひを潛めしこと、鎧の袖に歌袋かけし平家末期の英雄に及はずとも、『紀』に『にひばり……』の謎歌あり、又東征の砌尾津の濱の松が枝に懸け忘れし太刀を覩て『尾張にし』を歌ひ給ひしことの『記』に顯れ居るはさらなり、その途に一望千里なる武藏の平野を望

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

んで『吾妻や』を呼び、又死に瀕せんとして父の帝に贈り給へる辭の悲痛淋漓たるを思へば、日本武や確に

文雅の人なり

その平家の公達に劣るものあるは、漸く僅に蠻俗をのがれたるの世又止むなけむ。

此の如く、文雅の心掛げと敵を憐む慈仁の情けあり、また狂ふて惑はざるの情熱を宿し、しかもよく忠孝に厚く、神を敬し剛勇よく敵を刺すも、智慮又豊かにして些かの誇るところなく謙德自ら持し、加ふるに容貌魁偉、麗美乙女の如く、まさに仰ぐべきの大丈夫、是れを日本武尊となす。まことに是れ男子の絕頂にして、佳人が晝夜轉輾もとめて得ざる意中の理想人ならずや。されど悲哉今の代は再びこれを地上に見るべからず。憐むべきは耳緣を得ること容易からずして、徒に人世に慣ふる多恨多涙の佳美人なる哉。尊の如きこそひたすらたはれたるかたにはあらで、女にたやすからず思はるゝ僥倖なれ。世の女子戀しき男どちよ、心せよ。

"SO PAST THE STRONG HEROIC SOUL AWAY!!!"

講義

編者云く、若し明治三十一年の米作をして凶ならしめよ。經濟界の慘狀、万民の疾苦それ幾何ぞや。天幸にして斯年に豐穰を與へ、不測の災厄を救ひ玉へり。左れど、人苟くも其恩に狃れて、僥倖の私を爲す可らず。凶荒の事の如きは今にして先づ深く慮ばかるべき也。

本邦救荒の來歴

台灣　藤井米八郎

凡そ天災地變は人爲に由て是を免るゝと能はず。然ども凶荒は政治の完備と國民が備荒の覺悟ありて、平常勤勉と貯蓄を心掛くるに於ては、大に其災害を防遏するとを得るなり。蓋し天災疫癘及び凶荒の豫備は、國家文明の消長に最大關係を有せり。故に余は今既往に遡て少しく其來歴を陳述する所あらんとす。

享保元年（今を距る百八十四年前）德川吉宗公は將軍の職を繼ぎ、聰明英邁の資あり。曾て前代の弊政を革め、大に幕府の紀綱を張りき。これ江戸幕府中興の賢主なり。其在職三十年所謂享保の治これなり。前代の餘弊府庫の空耗甚し。其原因は蓋し驕奢虛文にありたれば、吉宗公故らに殿館の華麗なるを毀たしめ、或は侍女の姿色あるものには暇を遣し、又務めて衣食を質素にせしなど痛く自ら節して人を誡め、遂に普く節儉の令を下するに至る。然るに吉宗公の治世中、即ち享保十七年には實に左の如き大飢饉に遭遇せり、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

享保十七年凶荒表（其一）

		畿内	山陰	山陽	南海	西海
諸侯損耗半額以上分	六道四十六藩	一藩	四藩	四藩	十藩	二十七藩
諸公の原石高	四、九二〇、一五五石	五三、〇〇〇石	二八六、四四二石	八二六、二一一石	一、〇九二、六〇〇石	二、六四一、六六九石
同五年平均收穫高	二、四〇一、六九七石	一五、五八四石	一五七、〇八六石	四一四、七一三石	七一七、六二九石	一、〇四三、四四三石
同十七年度收穫高	六六八、二〇七石	一四、三〇八石	四六、五八一石	一三五、〇五四石	二五三、一一三石	一七九、三三九石
同十七年度損耗高	一、七三三、四九〇石	一五、四七六石	一一〇、五〇五石	二七九、六五九石	四六四、五一六石	八六四、一〇四石

享保十七年凶荒表（其二）

府藩廳	飢人
幕府管區	六十五万千九百八十八人
諸侯封内	百九十七万四千〇五十九人
廳下士采邑	一万九千九百七十二人
餓死人	一万二千百七十二人
死牛馬	一万四千二百三十八頭
幕府貢入米高	十五万一千四百石
幕府貢入米價額	十五万二千八百十五兩
貸與米	三十九万四千百〇三石
賑救米	一万〇百十三石二斗九升
賤糶	米二万六千石
合計	四十三万〇二百十六石二斗九升

右二表に就て觀るときは、享保十七年の飢饉が如何に慘狀なりしかは、茲に余が說及を俟ずして、讀者の推測に浮ぶものあらん、

然るに將軍吉宗公は、此飢饉に相前後して、専ら節倹を令して退守の方策を執りしのみならず、大に又殖產興業に傾注し、國利民福を計劃したり、今其重要の事件を擧れば。韓種人參、蕃藷、甘蔗等を栽培せしめ、本邦に砂糖の製造を奬勵し、且つ人を諸國に遣はして物產の興起產業の隆盛を勸めせしかば、諸藩も又是に倣ひて利用厚生の道を講ずる者多かりき。或は又甲斐信濃上野下野及び奥羽に亘れる一帶の地方には蠶業を興さしめ。或は阿波の藍、紀州の蜜柑、薩摩の烟草并に鰹節、或は中國四國の鹽業を首さし、漆器、陶器、金属、米類、製紙、製糸、織物等に至るまで、諸道各其土地の便宜により其物產の新に起り、或は改良せられたるもの直接に間接に多少將軍の誘導を被らざるはなく。殊に農は建國の大本にして米穀は國家經濟の源泉なれは、備さに勸農の道を定め、鰥居病衰老幼の者あるときは比鄰相助けて耕作せしめたり。或は田地の永代賣買を禁じて富豪の兼併を止め、貧民の流離を防ぎ、或は治水を計し植林を勸め、或は水利を興し新に田地を開かしめたるが如き、實に至り盡せり。而して中古以來租稅は概ね土地に課したれは、地租は四公六民乃至五公五民にて、之が徵收法に二あり。其一は檢見取と云ひ作物の豐凶を檢定して租稅を定めしが、其煩累に堪えざるより。吉宗公の世より定免法と云ひて五ケ年の租率を定めて納租せしむることなりしが、風旱水害の甚だしきに際しては其納租を免除せり。又大阪堂島の米相場の制を確定せしも實に吉宗公より創まる、

又吉宗公の治世にありて、大に江戸の市制を一變せり。當時市の廣さ方四里に逾し、住民百三十萬に下らず。火災の憂へ甚し。故に百方力を盡し、瓦屋塗屋の建築を勸め、神田、日本橋の如き繁榮の巷には家を撤して道を廣くせられたれば、市中の面目大に革まり、又此時市内に伊呂波四十七組の消防組の制を設けたり、爲めに火災は較や減少せしが如し、

尚又吉宗公は天文に心を用ひ、或は地圖を作らしめ、鷹狩を勵行し、養生所を建て、出板の法例を發し、或は飛鳥山、隅田、神田川堤、小金井、中野等には櫻、柳、桃等を植えしめしが如き其意慮のある所推して知るべし、

儲稱前將軍吉宗公の在職三十年間には、暴風、洪水、疫癘等前後四回に及び、其被災最も甚しかりしが、當時未開の世にはあれど、公が至善なる政治を布き、爲に其被害は久しからずして回復するに至りたるのみならず、此時代にありては却て國民は泰平の世を謳歌せり、

夫より降て、天明三年の大飢饉に於ては、陸奥國白川城主松平越中守定信侯（白川樂翁）は、臣下を召して訓諭すらく、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

救荒の要務は固より賑穀散財にあり而れども推原すれば尤も費を省き儉を守り以て國家盤石の固を建るを要す國家假令旱澇飢疫の禍なきも兵役慶弔來賓冠婚の諸禮なき能はす何を以て其資料に應せん今令を下して儉朴を守らしめん寡人率先して之を唱ふるにあらざれば衆必ず從はず施治の方は廉耻を勵し風俗を敦ふするを以てす若し少違あらば規諫を加へよと乃ち命じて恒膳を減し朝夕は一菜一羹を供し午飯は一肴を添ゆるのみ衣は皆綿製衾も亦然り。

又た老臣監察と救荒の事宜を講究して謂らく旦夕の急は救はざる可らず且明春の計も豫じめ講ぜざる可らす乃ち遍く稗、麥、乾菜、昆布、枯魚等の數種を購ひ白川に駄運し貧民に頒賜す驛人感戴し之を地上に置くに忍びず手から承けて馬背に載せ運搬を怠らず時に凶荒の爲め往還の人絶ち驛丁手を空ふして食を俟つ忽ち資給を仰ぎ欣躍奔趨す其事幕府に聞ゆ御勘定奉行桑山伊豫守命を沿道の各驛に傳へ穀及諸物を駄送して白川に達せしむ又治下の逢隈川堤漸く卑く輙もすれば水害を致すを以て定信貧民をして土石を運び堤を築かしめ米錢を給與す是れ實は役を與し恤を寓するなり(羽林源公の傳抄錄)

當年又出羽米澤の藩主上杉治憲侯(鷹山)大に救荒の道に盡されたり、今其一斑を舉ぐれば

天明三年は四月下旬より八月に至るまで霖雨止まず氣候秋の如く草物を着るは稀にして遂に奥羽一統の飢饉となれり此に於て上杉治憲日夜斯民を救濟せんことを苦慮し八月中より貴賤となく粥を用ゐて飯米を延すべき旨を命じ又酒造及穀製の菓子を禁じ備米庫を開き毎日百俵づゝ下直に賣與し町家へは義倉米に引足米を下附し又藩吏數名を越後の三輪渡邊、酒田の本間へ遣はして借財し新潟、酒田兩港に於て米一萬三千俵を購買し新潟の米は兩關の驛より駄送して小國、中津川の窮民に給し酒田の米は最上川より船漕し下長井の離村に施す又城下諸郷數十所に於て日々男子には三合五勺女子には二合五勺を與へ味噌倉を開き人毎に十匁を與ふ尤も貧困なる者へは衣類をも給す又屢々臣隷を召して救荒の要を諭し三時の食膳必ず下民と同じく粥を用ふ此年未曾有の凶作にて初めは寶曆五年に比して二分增と唱えしに秋收に至ては殆んど皆無に屬せしも治憲至誠の心を以て力を救荒に竭せしにより上下一同一家の思を爲し富商豪農は競ふて施すの多きを以て自慢するの風あり米澤封內は遠山幽谷の民といへども一人の餓死離散する者なかりし(鷹山公偉蹟錄抄錄)

亞で天保七年の大飢饉に至りては、有名なる二宮尊德翁は民間にありて、茅屋の民苦を親しく知察し、大に救荒の災害に備えたり、其餘德は十數國に及び、其遺德は今日に至るも尚赫々たり、請ふ翁か救荒濟民の事蹟の其一端を舉げんに、盖し左の如し、

翁曰、天保四年同七年兩度の凶作七年最も甚し、早春より引續き季候不順にして、梅雨より土用に降續き、季候甚だ寒冷にして陰雨曇天のみ晴日稀なり、予土用前より之を憂ひ心を用ゐしに、土用に差掛り空の氣色何となく秋めき、草木に觸るゝ風も何となく秋めきたり、折節仙より新茄子を到來せるを、糠味噌に付て食せしに、自然秋茄子の味あり、是に依て意を決し其夕より凶歳の用意に心を配り、人々を諭して其用意を爲さしめ、其夜終夜書狀を作りて諸方に使を發して、凶歳の用意一途に盡力したり、其方法は明き地空地は勿論、木綿の生立たる畑を潰し、荒地廢地を起し、蕎麥大根蕪菜胡蘿蔔等を、十分に蒔付させ粟稗大豆等總て、食料になるべき物の耕作培養精細を盡させたり」「又曰、烏山侯の依賴に依て救荒の方法を、一村毎に諭し極難の者の內、力役に就くべき者と就くべからざる者と、二つに分ち、力役に就くべからざる老幼病身等千有餘人を烏山城下なる、天性寺の禪堂講堂物置其外寺院又新に小屋二十棟を建設け、一人白米一合づゝを四十人の組となして、一度に一升の白米に水を多く入れて、粥を炊き鹽を入れて一日四度づゝ平等に與ふ、斯る方法にて同年十二月朔日より翌年五月五日まで救ひ遣し、飢人鬱散の爲め藩士の武術稽古を此所にて行はせて縱覽を許し、折々空砲を鳴して鬱氣を消散せしめたり、其內病氣の者は自家に歸し又別に病室を設けて療養せしめ、五月五日解散の時は、一人に付白米三升錢五百文づゝを渡して歸宅せしめたり。力役に付べき達者の者には鍬一枚づゝ渡し、荒地一反歩に付起返し料、金三分二朱、仕付料二分二朱、合せて一兩二分、外に肥代一分を渡し、一村限り出精にて事に幹たるべき者を入撰し、入札にて高札の者に其世話方を申付、荒田を起反して植付させたり、此起反し田、一春季間に、五十八町九反歩植付になりたり、實に天より降るが如く地より湧くが如く、數十日の內に荒地變して水田となり、秋に至りて其實は直に貧民食料の補となりたり、其他沓草鞋縄等を製造せし事も莫大の事にして飢民一人もなく安穩に相暮し、領主君公の仁政を感佩して農事を勉勵せり、豈に悅しからずや

翁又曰、右の方法は只窮救の良法のみにあらず、勸業の良法なり、此法を施す時は窮を救ひ、遊惰の者をして自然勉強に趣しめ、思はず知らず職業を習ひ覺えしめ、習性と成て弱者も强者となり、遊手徒食の者なく、人々遊手で居るを耻ち徒食を耻ぢ、各々精業に趣くなり、夫惡で貧えざるは窮を救ふの良法たり飢饉凶歳にあらずとも、救窮に志ある者深く注意せずんはあるべからず(二宮翁夜話五抄錄)

夫斯の如く、貿易及び交通未開なる舊幕時代にありながら、凶荒に際しては、賢明なる幕府將軍及び藩主の世にありては、其治下人民を救護せる事、恰も慈母の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

亦見に於けるも啻ならず、寧ろ今人の豫想外に出でたるものあり、舊幕を見るに只管壓制苛酷とのみ臆測するは否なりと云ふべし、

抑も年に凶災あるは猶一身に疾病を醸することあるが如し。疾病素より恐るべしと雖とも、平素攝生を忽んじて、豫て萬一に備え、常に用愼怠ることなきに於ては、假令一朝疾病に陷ることあるも久しからずして是が恢復あるべし、蓋し人に疾病あるが爲に生を存す。斯の如く時代に凶災あるは、恰も人一代に遭遇する疾病たるが如し、是れ必ずや吾人が存世の自然淘汰なれば、是に謹嚴の念慮と平常に施て勤苦蓄積の思慮なかるべからず。

而して災害の豫防に就ては、諸災害と其季節の關係は甚だ切要なり

自紀元千二百五十一年至同二千五百五十年 千三百年間凶災月表

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
暴風度數	二六	二五	二三	二一	一〇	二四	一四	一三	二四	八〇	一七	一〇	三一七
大火度數	四三	四九	四六	六〇	三三	八	八	一〇	七	四	一五	二九	四〇九
山火度數	｜	一	二	三	二	二	四	五	二	｜	一	三	三三
旱魃度數	一〇	一四	三	一七	三〇	四九	一七	一四	四九	一〇	二	八	二六九
霖雨度數	三	四	九	九	一四	一八	一九	一八	一六	一〇	八	二	一九九
洪水度數	｜	四	五	七	二	四三	七	六四	一〇九	二三	二	三	三四四
疫癘度數	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	二六六
噴火度數	六	一〇	二三	一五	八	四	七	一九	｜	三	九	六	一二九
地震度數	一〇三	九	二四	九	二八	二四	一三	一四	一五	一二	二四	二〇	一、二〇二
海嘯度數	五	一	三	三	二	｜	四	八	一五	六	五	三	四九
合計	一七	三二	三八	二九	二八	三六	二九	四四	四八	七三	一六一	一六七	三四六六

右表中、年中凶災の最も多きは秋分にして、八九月なり、其最も少きは冬期、十二月、一月なり、而して本邦の生産物中主要なる米作に大害を被らしむるは、二百十日の厄日前後にあり、其厄期の暴風の源は支那海或は太平洋に發す、太平洋にありては北緯二十度の南に當り、則ち夏季北太平洋を蔽える高氣壓の南に當る一部分なり、或は時として太平洋中低緯度の處より起り、比律賓群島を過ぎバリタン水道を經て支那海に進入す、或は台灣の南方の海上に於て起るものあり、而して其進路たるや台灣を過ぎて支那大陸に入るものあり、或は九州四國を犯し本土に入り、若くは日本海に入りて北海道に出て、大害を全國に及ぼし、或は太平洋中に起り小笠原群島を犯して直に本土中央部を貫くものあり。此二ヶ月の天災は直に本邦米作の凶產となり、其損害最も甚し。

雜録

紀元節の一生面

馬陵生

紀元節の節會を以て、單に神々敷儀式とのみなすと勿れ。徒らに此日を以て、純ら朝廷の大式とのみ心得ると歇めよ。千早振の枕詞を以て綴れる祝詞を歌ふて、酒饌を捧ぐるものは、神主の事なり。燕尾服を裝ひて、順次同一の祝詞を陳ぶるものは、役人の事なり。國民は神主のみにあらず、役人のみにあらず。噫國民は國民なり。今只に彼等に同し、改裝神酒を酌むの儀文に拘掌して、此日を空了せんとするものは、祖國的愛情欠乏の徒なり。哀れ遠祖の建業を認めざるの徒なり。我國性を解せざるの徒なり。

或は明治維新を王政復古といふ。復古々々、吾人亦復古といふ。憾むらくは、吾人の復古とは、彼等と其解意を異にす。曰く最古に復へるは、最新に復へるの意なり。吾人復古の解義、正に此くの如し。何を以てか之をいふ。昔者、加茂本居

の諸先人、當時の紛々たる學説に堪へずして、學問の復古を唱へ、萬葉、古事記等訓詁講讀の風起る。然れども單に之を以て、古文辭の辭義、之より明晰なるを得たりとする、皮相の解を棄てよ。夫れ吾古文辭の、今日文學上の價値何程かあらん。吾人は更に彼等古文辭義以外、朧氣にも我國性を開發せしめたるの勞を多とするものなり。旭日に匂ふ山櫻の一詞まさに千古の絶調と知らずや。古文辭を以て覆はる吾等の遠祖は、經略あり、手腕あり、感情あり、血涙ある頭緒の史跡にあらずや。吾等は、天眞、剛健、勇往、邁進の性氣、初めて此處に見るを得たり。誰か吾人の解意を誤了して曲解なりとするものぞ。

光譽ある憲法發布を以て、我國民長途の一段落となし、早くも其主義を抛ちたるものは誰ぞ。哀れ二十二年の當日を以て憲政發揚の歸着點と速了するものは誰ぞ。公等健在なりや、吾等不幸直に同ずる能はざるを憾みとす。吾人は明かに覺悟す。吾人は憲法發布の日を以て、吾國民の奮起すべく國性の發揮すべき發起點となすものぞ。法案雨の如く、第何條第何欵、陰險詭僞、自利買收、是等法案の通過、之れ公等が所謂國利民福を思ふ情熱の權化か。之をしも愛國者の愛情と想へとか。吁吾等國民、冷たき法案を抱きて何にかせん。何事ぞ吾國民魚を求めて石を得たり。

憐むべし時務の人、法案情實に束縛せられて、活手腕なく。學者繁苛の組織論に拘泥して、卓拔の論議なし。傳道方法の相談、交捗國民の信仰と、何等の關りなし。國民は盆栽にあらず、徒らに纖細繁縟せられて了るべきか。見よ、春頭二月殘雪の裏、已に竹孫子の破格突萌するものを。

噫、紀元節、汝の使命は恰當、南都の客舍、落葉堆裏、鹿鳴の呦々たるを聽きて、惟に古昔を懷しむるの意か。將たや朔北新墾の村舍、東天旭日群豚爭ふて、國を出づるの朝爽の氣を想へとか。吾人は爲に紀元節の式場を、郊外春草萌芽の開展する所に設くるの議を献ぜん。世上の諸君子以て無稽の献策となす耶、非耶。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評釋『戀八卦柱暦』

八濱捌泉

三　阿三の性格

〔中卷〕黒谷參詣の條に『ひとり娘のことなれば、聟を取て家をつがする筈なれど近年諸國の銀もすまず、家屋敷をも人手に預けるひつそくの身、此跡を娘に渡し苦勞さする可哀さに一代切に家を捨よめいりさせた親心』と、謂ふ句あり〔上卷〕茂兵衛に金策を頼む條にも、『知りやる通の御身躰、下立賣の家屋敷を、町衆の加判で、一昨年三十貫目の家質に入たけな、それでも昔の株の家』と、阿三が談話の語脈を傳ふて想像を廻らせば、岐阜屋の先代は由緒嚴正しき家柄なりしと雖も、道順の世に爲りて非常の落魄を極めしならん。而して道順の爲人は奈何といふに、お袋と阿三との會話にも、『さればいの、とつさまは一昨日花のもとの連歌の會に夜をあかし少風氣の有うへに、風呂宰相樣の朝茶の湯、彌風を引そへて』と、想ふに、家門零落の後は、專ら挿花、抹茶、連歌などの師匠をして、世を微に送りし者の、『家一軒を兩方へ質に入れたが斷はれては、此の岐阜屋道順が一ぶんがすたる』と、天性極めて義理堅き人物なれば、隨て義理即名譽の念も強かりけん、即ち、名譽の念慮つよきが故に、『昔の株の家物入續いて』の、果は二重低當の借金ともなれば『とつ樣もかゝ樣も聟に無心云かけては、大事の息女にひけが付』との苦惱とも瘦我慢ともなりし也。斯る父母の遺傳敎育を受けし身の阿三は、果して奈何なる性格の婦人なりし乎。

人物の風俗趣味は、性格の反映なりとし謂へば、先づ阿三の風俗趣味を叙せんに、『おさんの當世女』の句ありて嗜好の衣裳は、『白無垢一重けんばうに蘆鷺の裙摸樣』、髪の形は仇な、『島田亂れてはら〳〵』、歌には『いつのはん化粧』と、實に奥丹波の杣人の眼にさへも、島原の女郎衆と見ゆる派出姿。西鶴の五人女に阿三が十五の花の姿を叙して『髪すき流し先をすこし折もどし、紅の絹たゝみてむすび、前髪若衆のすなるやうにわけさせ、金篲にて結せ、五分櫛のきよらかなるをさし掛、まつはうつくしさ、ひとつ〳〵とふ迄もなし、白じゆすに墨形の肌着、上は玉むし色のしゆすに肌着の切付見へすくやうに、其の上に唐衣の網を掛、さてもたくみし小袖に十二色のたゝみ帶、素足に掛緒のはきもの、う

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

き世笠跡よりもたせて、藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためといはぬ計の風儀』と、謂ひけるは虚言ならじと想はる。何となれば、今小町の評判を博せし程の阿三なれば、蓋し、渠が風俗趣味を察するも、既に性格の一斑を窺ふに足るべし。

尚ほ詳細に渠が心理を解剖せんに、金策依賴の條に、『エ、無念な男の身なれば、是式に親達に苦はかけまい』、亭主の不心中を聞いては、『男畜生とは連合以春殿、女房ひとりまぶつてゐる、男とてはなけれ共、あんまり女房をあほうにしたふみ付た仕方、涙がこぼれて腹が立つ』、と憤怒る。想ふに阿三とて今日此頃の、以春が不行跡を知らざるにはあらざれども、茶屋遊びや女狂ひは男の働きとやら、元祿時代の習慣に支配せられ、狹き胸の中のたうち廻る嫉妬の毒蛇を、我慢名聞の繩もて縛せし者の、下女風情のものに見返へられたかと思ふ刹那に、嫉妬の毒蛇は首を擡げて、遂に名聞我慢の縛繩を咬破せしならん。即ち『ノウ此うへに無心がある、そなたとおれと代て爰におれをねさせたも、いつもの格で以春殿がござる時、泣つ恨みつくどかせ、今宵は玉のなびきやる顔で夜のあくるまで抱ひて寝て、内どの者の見るまへ、幸かゝ樣とまつてなり、いき恥かゝせて本望とげたい』と、嫉妬の情に燃ゑて怒る。畢竟するに阿三の性格は、情強くして勝氣の天性に、『道順の娘ならば拵いらぬ、みやげいらぬ、育てた親に見込がある、自尊、我慢、名譽、外聞の化身たる道順の嚴格なる庭訓を受けしかば、絲竹管絃の婦藝は殊更に讀書裁縫の女紅にも優れて、情愛が厚く才氣も廻りて、世に謂ゆる男まさりの婦女なりしなるべし。斯る性格の婦人にして、若し夫れ良人の薄情、里方の貧困などの外物に挑發せられし時は、果して奈何なる結果を生ずべき乎。

親を離れては夫ばかりを依賴の女の、而かも紅い鹿子に心の色をぞ見する雛嫁の阿三は、以春に疎まれて夜毎の孤枕空閨、例へば賴む木陰に雨の洩る心地して、濡る袖の涙と共に行末を考ふれば、哀れ果敢なき思に浮みけん。『同じ手代衆の内でも茂兵衞殿の樣な、かりそめの物言にも、あいそらしうていつ腹立つ顔も見せず、ほんにあの樣な男持おなどは果報でござんす』と、主從の距てなき婦女同士の常とて、玉が切なさの思をほのめかせしに、『ほんに、いやれはそうぢや』と染々答

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

へける阿三の心の中は奈何に。想ふに、嚴格なる庭訓を受けし身の阿三と雖も、戀を生命の十七八なれば、冷い石のやうな以春の薄情に堪へかねて、惡緣結びし始を悔いし折から、以春とは反對の『おひそらしう、いつ腹たつ顔も見せ』ない茂兵衞を見ては、豈に戀神の矢に刺されざらん乎。則ち茂兵衞に對して戀ならぬ戀の情は常に渠の心頭を往來せしなるべし、宜べなるかな知るべし、猫に寄せての述懷の男女の配偶に關するとにあらざるなき所以を、例せば、飼猫を抱き寄せて、『猫にも人にもあひ緣きゑん、隣の紅粉屋の赤猫は見かけからやさしう此三毛をよび出すも、聲をほそめて恥しそうに見えて、こひつが男にしてやりたい』と、己が身につまされて同情の懷を、畜類の上にまで及ぼせしにやあらん。『こりや三毛よ、わるい男持なよ、灰色猫がぬれかけたら一度が大事ふつてのけ、此さんが從者ぢよいおねこ添はそゝゑ』と、の句ありて次に雄猫の、聲に焦れて狂ふ三毛を叱る條に『ヤイいたづらもの、大ぜいおねこの聲がするあの中へいてなんとする、エ丶氣のおほいやつじやな、こりや男持ならたつたひとり持物ぢや、まそとこすればはりつけにかゝる、女子のたしなみしらぬか』と、むら〳〵募る情に堪へかねて、無理に自我を警戒せしの暇にあらざらん。尙ほ抱ける猫の逃げ出せる途端に、『ヤイまそとこしの、いたづらもの、粟田口にいきたいな』と、咄嗟の間に叫びし渠の心理を解剖せんに確かに眞心對情慾の、爭鬪軋轢ありて苦痛煩悶、或時は眞心の爲に情慾を制し、或時は情慾の爲に眞心を眩し、恰かも二頭の毒蛇が頭を擡げて相咬むの狀を呈せしならん。而して以春の薄情と茂兵衞の深切とは、お三が我慢の火影に照らされ實際よりは寧ろ膨大の影となりて映りつゝ徒らに煩惱の迷を高めしならん。尙ほ加ふるに外圍の事情は之を促して、恰かも玉を峻坂に轉ずるが如く一瞬又一瞬愈々最後の破裂に向て走らしむ。則ち金策談合の傍に、『賴むはそなたばかり壹貫目調ひて、親達の苦をはらしてたも』と、眞人を袖にして手代の茂兵衞に、金子の才覺を賴む阿三の心中には、夫婦間の疎隔、里方の恥辱などの異分子はあれども、『賴はそなたばかり』の情は、蓋し動機の主要分子なりしなるべし。茂兵衞も祝酒の一杯機嫌に、「はれやれお氣がほそい、五十貫め百貫めで有ることか、ぎやうさんそうに夫程の銀くど〳〵あつ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

しやるとかいの』と容易に請合ひし者の、果は好事の魔に妨げられて哀れ繩目の恥辱を受けながら、少も『わるびれぬ性根』を見たる阿三の、感想は果して什麽に。按ずるに戀愛の極致は、異性間の犧牲對感謝の情なれば、茂兵衛が献身的の熱誠に激まされて、阿三は一向に情の恩を送らんと思ひ〳〵、果は義理も世間も人情も打ち忘れ、啻茂兵衛を一臆に聚めて、縱橫無盡に奮進せしが故に、其の經行の規矩に外れて衝突撞着、毫も瞻眄する能はざるは、敢て怪むべきにあらざる也。則ち阿三は母親をねいらせて、心もしめるねまきの露、玉が常の寢所に忍びの條に、『茂兵衛の難にあやつたは、皆此さんがたのんだ事と、『茂兵衛阿玉の關係を、露知らざるにはあらねども、寧ろ茂兵衛の爲には生命も吝からぬ程の阿三なれば、『ぢたい妾があの人に骨身にそんでほれまして、二年目で、みることはいやじやのとあいそづかしばつかりで、やさしい詞もかけられず……戀こそ叶はずともほれたは定よ、爰で心底見せいではと我身を捨た此玉を、まだ不便とも思やるまいとほんにうらめしうござんする』と、玉の熱情を聞いては、寧ろ愕然として失望落膽せしならん。畢竟するに、寢床交換の痴戯も、此の失望心と嫉妬心とに挑撥されての現象なるべし。『エイなんのいの、昔の井筒の女とやらはねたみのほむらに堤の水が湯となつた、男の恨に身が燃る』とは、豈に以春に對してのみの嫉妬ならん乎。而して暗中偶然の錯誤に依りて、茂兵衛と同衾の夢を、以春の聲に驚かされて、二人一所に逃げ出でしは、實に咄嗟の出來事にして、思慮分別の遑なき裡の所作とは雖も、茂兵衛に對する阿三の、意識的の戀愛を許すにあらざれば、否な、寧ろ滿足の劣情を懷きしと云ふにあらざれば、決して說明し能はざるの行爲なるべし。岡崎村の條にも、『顏うちあげて顏とかほ見合せ、顏をあかめて、涙の外に詞なし、なな茂兵衛殿、とてもわしらは今日あつてあすない身』と、既に死海の怒濤に揉まれながら、尚ほ束の間も離れがたなき嫣嬲の風情。『木の空にさらされて、かばねを鎗でつかれても、思ひ置くとござらぬ』と謂ふ句ありて母親に、『ア、悲し、また死用意ばつかり』と叱られ、盡きぬ涙の顏を擧げて、『お宿もとへおさん樣を御同道なされ、御命たすけて下されば科を私ひとりに受け、物

の見事に死ましたい」と、道順夫婦に手を合せて泣ける茂兵衛を尻眼に、『ア、おろかしいといふ人じや、われひとりいきながらへいひわけが立程なれば、ふたりいきても同じ事、そなたはいかうろたへが來たそうな』と、年長の茂兵衛を諭す工合、蓋し茂兵衛と一緒に殺さるゝを、寧ろ本望と觀せしなるべし。道順が慈悲の錢を旅銀に、他眼の關を逃がれて露の奥の、丹波の僻村に手鍋さげての詫住居、段々馴れ睦むに連れて、茂兵衛の誠ありて情深く、慕はしき男なるとを切に感じ、斯る男と寐すは女の冥利と喜びしともあるべし。例せば、駈落の始には顔とかほ見合せ、『顔あかめて』の初心さも、遂に『エ、きり〳〵戻りはせず、此身に成て恵方參り所か』の、擧動も言葉も戀中の女房氣質となるに到る。『日頃申通り悪緣と思ふて下されませ』と、茂兵衛が涙ぐみ打しほれて謂ひけるに、『又おなじと斗りそれは互の因果』と、愚痴の多きは女の常なるに、而かも四五十日の長の月日に、毫も身の不運不幸を嘆きしとのあらざりしは、蓋し阿三が心裡の秘密を開發する最好の金鑰ならん、而して追人の網目に罹る條に、『扨いとしいは幼稚馴染の以春樣』と、謂ひながらさめ〳〵と泣きしは、生死の間に處せし身の、自然の人情なるべし。道行乘合駕の條に、『おさん茂兵衛に云ふやうは、よしなき女の悋氣ゆへ何の科なきそなたまで』と、謂へるに到りては、毫も世を咎め人を恨みざるの心底、實に玲瓏として一點の塵をも留めざる也。

《四》雜　俎

按ずるに巣林子の目的は、戀愛の衝突、好意の悪果を詳敍して、人生に於ける運命の秘密を歌はんと欲せしならん。則ち戀愛の衝突を擧ぐれば、以春は阿三に、阿玉は茂兵衛に助右衛門は阿三に、阿三は茂兵衛に戀慕懸想。而して以春は阿玉を挑んで跳ねられ、阿玉は茂兵衛を戀ひて拒まれ、助右衛門は阿三を思ふて否まれ、阿三は茂兵衛を戀ふて苦み、それ〴〵機會を見て鬱憤遺恨を晴さんと謀る。次に好意の悪果を數ふれば、則ち茂兵衛は阿三の爲に、印判を盜で罪に落ち、仇を情の阿玉の行爲は、茂兵衛の罪を増し、其の情に酬んとする茂兵衛の所爲は、阿三が身の破滅を來し、梅龍が二人の無罪を證せんが爲の、玉の手討は却て證據の種を煙滅せしむ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

るの不幸に到る。吾人は『戀八卦』を讀で、切に運命の不可思議にして、人間の極めて脆弱なるとを忘るゝ能はざる也。

隨感

◎夜半母のおもひ

兒を抱きて眠れる母、夜半偶と目を覺し、つく〳〵と觀ずる樣、扨ても生死の界は一息かな、もし今にも卒然として此の呼吸斷なば、親愛の交通、刹那に破れ、語るとも聞かず、呼ども亦た應ふまじ、吾にまつろひて離れず、吾も引しめて離れじと思へど、氣息忽然斷絶するの後は、果夫れ如何にするを得んと、涙胸に滿ちて、一身寒く、意はず、其兒を引寄せて固く抱けば、安眠の顔、天國に向ひ、ほゝゑみの姿、聖なる御使等と遊ぶ。御身、何事も知らず思はず、たとひ此の母にして今先づ忽然として逝くも、直ちには母の歎きを察し玉はじ。左るにても、罪なき無邪氣の吾兒やと、顔押し當てゝ涙ハラ〳〵と落せば、彼兒愕然として目覺め、欣然として母の頸を抱く。母、問て曰く、われもし死なば、一身は如何に爲し玉ふや。兒答へて曰ふ、私も死なんと。復た直に眠る。

大磯だより

梅と松

湘煙女史

曾て居を横濱に構ふや白梅一樹を贈る者あり幹古て枝太だ雅毎春花を着て馥郁香書齋に達すこの梅固誰の有たるやを知らず其梅を贈るの人おのが姓名を告げず吾が知人の手を介して吾が庭園に移したればなり吾は其姓氏を知らざる爲更に梅花と併せて其人の芳しき其好しみを措かざるなり東風に逢ふ毎に殊更に去て春を杉田小金井の他園に探らざるはこの一樹の梅花に座して天下の春を占領するの感懐あればなり其子實は毎に熟するを待たずして村童に奪取せられ無殘の感なき能はざるも竊かに吾が家の徳近隣に及ばざるを恥づ大磯の新築正に成り舊居他に讓らんとするに及び庭樹悉く家に屬せしめ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

しと雖も獨り梅樹と薔薇は吾に追隨して大磯の新居に移れり梅は書窓に對して栽ゑ薔薇は竹籬を繞つて植ゆ薔薇は都て睡眠の中にあるもの丶如く眠覺て往時の如く茶椀大の花輪を着くるの日あるや將又遂に眠覺るの日なきやを卜する能はざるも梅は既に蕾を舊居に於て結び始てこの海岸の春に逢ひしなり吾病間なる時杖を曳て梅樹の下を辿り且幹を撫して曰く海岸の空氣太だ吾に適すと雖も恐る獨汝に適せざるを汝に適せざるを知りて猶且之をもたらすは汝を棄るに忍びざればなり汝請ふ之を恕せよ汝は蕾唇結んで解けず吾甚愁ふ果して能く解くの日あらば縱然百花に魁たらざるも吾何をか憾まん只遂に其解するの日なからんを恐ると而後花開く數枝開て花の小なる吾が指頭の小なるよ小し吾之に對して如何か情なからん人事の變遷を知らぬ顔に獨り盛んに嬋妍の色を誇らんともせず却てこの病客と共にこの新天地に粛然たる新春を作るかと思ひては吾は轉た可憐の情に禁へず卒吟して曰く

白梅移植海之濱。　此地同レ吾始遇レ春。

憐汝着レ花花太瘦。　風霜猶見舊精神。

之を賦する後數日人あり松樹を寄す圖廣くして樹稀れ棄駝師之を那邊に植ゑんと謀る命ずらく梅花に添ふ最も妙と且五絶を賦してこれを寄するの人に謝す、

松樹謝二君寄一。共レ梅栽得隣。丈夫當レ無レ悔。旦暮對二佳人一。

新雜誌

◉海舟先生に對する輿論　先生一度び逝きてより、各新聞、各雜誌皆な痛惜す。古人曰く、棺を蓋て後定まると。人死すれば俗情一變し、其評大抵當る。先生の本領の如きは、未た俄かに悉くす可らすと雖も、近時悼惜の辭を見るに、當らすとも遠からじ。世人亦た先生を疑ふものあらす。

◉東京經濟雜誌（九六四號）　田口卯吉君の署名をもて、海舟勝伯の一文を掲ぐ。曰く、勝伯が和戰何れにても決行するの勇氣ありて君命に因りて恭順謹愼の實を致したると大なりさす。曰く、明治以後の勝伯の事業は全く緒餘に屬す。曰く、余か伯に於て尤も推服する所は、衣食に驕らすして貨幣に吝ならざりしとなり。

◉世界の日本（三卷一號）　復活せり、一派の青年の喝采する所なり、外交時情を審かにせんさする苦心多さすべし「同盟か、獨立か」の社說には、獨逸の野心を數ふ、又曰く、方今は協商の時代也、同盟の時代にあらすさ。「財政の根本改革」は、一切の關稅に類進法を應用せんさ云ふ也。

◉太陽（三卷五號）　久米邦武氏の「國躰論」は曰く、羽民の結合の間に其の交通を隔つる大臣小臣あれば、其の禍毒は先づ皇室に發すさ。高山林次郎氏の「詩歌に人躰美」は、凡そ古來の大詩人大劇詩家が、繪畫的物象を叙說するに當りては形躰彩色を直接に記述する代りに、觀念もしくは動作さして間接に表現せむとを務め、直接の記述を須要さするの場合には、個性の一端を擧て余は讀者の想像に委ねたりさて、今の小說家が人躰美を一々叙說するの迂を誹れり。凡そ修辭上に一を言ふは、半を言ふよりも少なきと、古人夙に說あり。海江田子の實歷史傳は綱よ面白し、西鄕、月照さ水に沒するの前後を談す、實情見る如く、偉人の心胸千古に照す。

◉還の浦第二十號　藤井貢一氏の「太平記に現れたる人物」の一文あり

◉台灣協會會報第四號　、台灣鐵道創立委員に對し其の解散を勸むる書あり、三技氏署名す。蓋し桂子の意見なるか、其の私設事業の成否は寧ろ之を一任するも吾人は其の官設を不可とするもの也。台灣なざば、未だ鐵道を架設すべき時機にあらず、坪井次郎氏が「台灣の衞生談」あり、打狗邊に病院を建設して肺病患者を受容せば良結果を得べしの說見ゆ。工學士齋藤賢治氏の「樟腦製造」談は有益の注意多し。其他、石油、諸風俗等の調査白し。

◉憲政黨々報第一卷第四號　板垣退助伯の新年書翰あり、十頁一万言の長文なるが、中に言へることあり、「我帝國の現に列强の間に畏敬せらるゝものは他なし、唯だ其の陸海軍備の實力あるが爲めなり」。又言く、政黨にあらざる集團は、其の一團結如何に强大有力なるも、之を私黨と看做さゞるを得ずと。

◉婦人新報第二十一號　各地に支部設けられ、其報告の逐次增加するは慶すべきことなり。

◉日本の家庭第五卷一號　其の枚數多くして而も編輯に勉めたる感ずべきことなり。

◉大日本婦人教育會雜誌　巖谷小波君が「家庭と兒童」の講演中、「お伽噺の性質」は同君特得の所なり、曰く、火鉢がものを言つたり、花がシヤベツたりすることは、嘘になつて甚だ宜しくないと言つなものがあつた。併し此の嘘にも、誠らしい嘘と、うそらしい嘘とあつて、嘘らしい嘘は差支がないのであります。兒童は、其の嘘の爲に廣げられた想像の境に非常な面白味をさつて居るのでありまする。憂ふべきは彼の誠らしい嘘で、例へは、狐が人をだますとか、お化にお前をやつてしまふとか云ふ樣なるは、誠に宜しくない云々。又曰く、よし事は惡くないにしても、兒童の頭を人情的にすると云ふとが、あまり好しくないのであると。

◉日本弘道叢誌第八十一號　西村茂樹氏の蓄妾論を載す、極めて痛快の文字ありミルトン女史が米國プリンモア女子大學の話は、眞に滑山しきとなり。

◉政教時報第一號　、れぞ監獄教誨師問題この方勃興したる佛教國民同盟會の機關雜誌にして、所謂佛教を以て公認教とか稱するものとせんとの主旨を論議する爲とのとなり。同會の發端以後の內務省反抗運動の顚末を載せたり。筆を取るものは、東本願寺派の靑年僧侶學生と見ゆ。

◉教育時論第四百九十四號　兩院の建議共に小學校教育費國庫補助論に就中し、地租增徵以後の社會にては、更に其必要なるを論ぜり。堀內氏の小學習字制改革論は、甚だ綿密なる議論なり。

◉女子の友第二十七號　女子高等師範學校長高嶺秀夫は、女子高等教育の必要を論じて、例を外國に取り、また中等以上の女子は、諸般の學術を知り、女德あり、また外國の事情を知り、外國語に通じて、外國婦人に相對して、耻ぢざる丈の品位を表はざるべからずと說けるあり。寺田勇吉氏の女子の天職は、通常の議論なり。

◉教育實驗界第三卷第一號　本雜誌一週年を經へたるにより、諸家の祝詞あり兒童研究、教育實驗欄により賑かなり、三宅博士の得意なる學校衞生講義け、其續稿を揭げたり。

◉中央公論第十四年第一號　反省雜誌は、其十三年間の歷史を有せる題號を變じて、中央公論と稱して、本年一月、其第一號を變す。內容は、從來と異りたる度少く、たゞ政治經濟論をなすとを增加したる差あるばかりと思はる。十九世紀前後の一年（社說）は、日本人の精神道德の頹廢を慨し、九州と東北（落合得二郞）は九州を貶し、東北を褒げ、九州は西班牙たるべく、東北は露國なるべしといへり、露堂茶話は、我邦の印刷界に佐久間貞一氏と功勞を等しうすべき、大內靑巒氏の新聞事業の勃興、秀英舍の創立談等あり。海外新潮、此欄の如きは、方今の雜誌界にては、中央公論の所有物の如くになりたり。

◉日本人第八十三號　王政と幕政とを論じ幕政復古の傾向を離すとは、陸海軍獨り重く、教育輕く、武斷政治行はるゝの傾向を離するもの。憲政本黨の根本的矯革は、同黨が、增租の反對と軍備擴張の二政策の矛盾せるを離し、勇斷以て軍人の怒を恐るゝとなく軍備緊縮と非增租とを主義として、民心を收むべきを論じたり、志賀重昻の風土要論は其第一北日本と南日本とを論じ、如斯き有趣味の人文地理論は、當時、氏によりてのみ聞くを得べきもの。

◉女鑑第百七十二號　敬慕すべき人物としては、女子に向ふて、楠正行を手本とすべしと說き、高津鍬三郞氏の女子普通教育と英語は、高等女學校に英語を入るゝの不得策なるを論ぜり。

◉教育時論第四百九十六號　現文部の鼎は地租を增徵して、小學教育費を國庫

支那にする能はざらんか、普通教育は枯死せざるを得ずといひて、文部の鼎の輕重を問へり。

◉うらにしき第七十五號　女學生の俗化（山田勢彥）は、女學生まで拜金宗に陷り、金に嫁するの弊習を嘆ぜり、附錄としては、殘月庵主人の初步、金子筱下庵の半風あり。

◉教育公報第二百十九號　藏原惟郭氏の教育の新主義として、國家協同共存主義なるものを發見したるをいひ、山崎彥八氏の小學校の英語科に就ては尋常小學より英語を課すべし、然らずんば、小學校の英語なるものは、斷然之を廢止すべしと論ず。藤澤博士の算術教授法、儒學上に於ける子思の地位等あり。

◉統計集誌第二百十三號　論說には、現在人別職業調方一斑（世良太一）統計の進步（光岡光彰）軍事統計（伊東祐穀）米國の國務調査（河合利安）等あり。表には全國人口（足立公忠）本年の麥作（簡井源次郎）サガレン島に於ける我邦出稼人の漁業（廣瀨吉雄）等あり。

◉東京經濟雜誌第九百六十三號　社說には、佛國絹糸問題、製鐵所費の膨脹避くべしあり。また、家屋稅法案、郵便條例改正案、醫師會法案を難ぜり。何等利史（半山）サンシモン傳（横山雅男）代々の調（鼎軒、三淺）あり。論說には、家屋稅斷行すべし（服部暢）寄書には、中世の經濟思想と其原因論（藤田重太）あり。

◉教育實驗界第三卷第二號　大村仁太郎氏の、小兒の謝罪に關する論、小池民治氏の兒童を賢良ならしむる方法あり。太田秋芳氏の小學校生徒用紙腰掛案は工夫中々のものなり

片々

●婦人の從軍記章　廿七八年役に病傷兵看護に從事したる、赤十字社の看護婦は此程、廿八年勅定の從軍記章を授けられたり。

●臺灣移住氏と家庭　臺灣日々新聞は、「圓滿なる家庭」と題して、內地人の臺灣に移住するは　出稼根性を出して、爲に不正の行爲をなすに至る、これを救ふの法は、彼等をして、家庭を形成せしむる在り、其の方法としては、旣に妻子ある官吏には、相當の便宜を與へて、之を呼寄せしめ、妻子なき者は、勉めて、其妻帶を促がすべし、特に吏員採用の場合には妻帶者を先にするが如き策に出づべく民間にて人を雇ひ入るゝ場合にも同樣なるべしと論ず。

●福澤翁と一夫一婦說　福澤翁の舊主奥平家に用ゐらるゝに至りし原因は、同家の元老島津祐太郎が、大奥の芳蓮院といふ女隱居に西洋にては、男女の間柄一婦一夫に限るといひしにて、大に之を喜び西洋外道の福澤を近けたるが元なりといふ。翁曰く「一夫一婦の正論決して野蠻でない、世間の多數は同主義で、殊に上流の婦人は悉く此方の味方であるから、私の身がこの先、何時まで生きて居るか知けれども有らん限りの力を盡して、前後左右を顧みて、ドンナ奴を敵にしても構はぬ多妻法を取締めて少しでも、此人間社會の表面だけでも見られるやうな風にして遣らうと思て居ますと。

●福澤翁の新著女學論　福澤翁が昨年九月大患前に脫稿したる女大學評論二十箇新女大學二十二章あり、近日世に公けにせらるべしといふ。翁の女學論主旨は、旣に一通り知れ渡りたるとなるが、其書の出版は待ち望まるゝなり、

●婦人の海外出稼を自由にすべし　時事新報は、日本人の海外殖民の事業を成就せしむるには、彼等をして、到る處に土着せしむるにあり、されば、家庭を要す家庭には妻あるを要す。故に盛に婦人の海外出稼を奬勵すべく、彼等の渡航に關する不自由を解くべしといへり。婦人海外出稼の禁止同樣なるは、醜業婦の出稼を防ぐが爲めなるべしと雖も、醜業婦出稼は、日本國にのみ限りなき事ならねば敢て國辱といふまでの事に非ず。醜業婦にても、本人の心掛次第、外國にて相當の儲蓄も出來、歸國の上家を成す例もあり、また婦人の海外出稼は醜業者のみ限らねば、渡航事情の如きは、一切之を問はずして、自由に許可すべしといへり。

●夫人の素顏（下田歌子女史）報知新聞の夫人の素顏に、下田歌子女史を記して曰く、女史は、先哲叢談の著者東條琴臺の孫女、十五才にして、皇后陛下に召されて宮內省に出仕し、名さへ「歌子」と賜はりたり、これ女史立身の發端なりとぞ。また伊藤侯は女史を評して、「大臣の器あり、」といひ、大隈伯また「女傑なり」といひしとか。

●女學雜誌第四百七十九號　新正一轉の心を抽き出して前悔を追ひ萬功を誇ると共に愚なり須く猛然として一新の氣慨奮起すべきを論じ家庭に於ける心體共に規律の必要なるを說きたるは婦女子の最も注目すべき所にして載する所總て女子教育の好指針なり（紀伊每日新聞）

●月下氷翁　福岡縣に金子某といへる七十五才の翁あり、チョン髷を戴けるにも

頑固の程知らるゝものなるが、其だ嫁取ヶ聟取りの世話を好み、筑豐二州は勿論、薩肥の間に迄馳せ廻りて媒介をなし、其數既に七百七十餘組に及べりといふこれや眞個の月下氷翁

●淑友　醜友佐賀に婦人淑友會なる者起る、其會員の身元を洗へば汚れざる思想と汚れざる身體とを有する者僅に一兩人のみ(東京朝日新聞)

●乞食物語三則

△乞食免許鑑札　佛蘭西及び以太利にては、乞食をなさんとすれば、免許狀を得ざる可からず、かくて免許狀を得たる乞食は公然その商賣を營み得るが故に、旅行者に取りて彼等の煩しき事は一方ならず。佛蘭西に於ては、乞食は一個の藝術として知られ、如何にして人の慈善心を動かし得可きかの手段は絶えず彼等に依りて研究されつゝあるなり。左れば彼等の團結は頗る堅固にして、彼等の中にはまた多額の貯金をなせるもの尠なからず。

△乞食の人名辭書及新聞　巴里の乞食は印刷せる人名辭書及新聞を有す。この人名辭書は各地方の慈善家の姓名を錄したるものにて、其の人々の職業は勿論、宗教政治上の主義及び何時頃在宅せるやを記述せるものなり。尚彼等は乞食新聞なるものを發刊す。これまた彼等の職業上に有益なる事柄を記せるものにして、最も多ほく慈善家を有せるの地方などはこの新聞の好材料となれるなり。

(以上二件大阪毎日新聞)

△一乞食あり、越後中頸城郡の者なり。朝夕人のに立ちて得る所の幾分を餘して現に一千餘圓の多きを貯蓄したるを以て、此程價八百餘圓を以て村內の一家屋田畑を購ひ、從前の乞食仲間を招きて一大祝宴を張れり。

●一下婢　主家を逃亡するの際、書置をなして曰く「再たび夫歸り來り候て來月初旬芽出度合卺の式を擧け申候間御ひま頂き申候」とあり、末に「なほつまく\〵申上度事有之候へ共、餘白なければ以下次號」　(讀賣新聞)

●小學生徒の禁煙　金澤市長は市內小學校生徒の禁煙を令したり。

●兵士と妓樓　妓樓に命じて、兵士に限り、其價を廉にすべきを命じたりとは、仙臺市の近事なり、軍人優待の弊遂に爰に至れる乎。

●女學論壇雜爼

◉女子の普通教育と英語(高津鍬三郎)……………………女鑑第百七十三號

◉女學生の俗化(山田豐彥)……………………うらにしき第七十五號

◉品行家風(福翁自傳)……………………時事新報一月中

◉圓滿なる家延……………………臺灣日々新聞一月廿一日

◉夫人の素顏(下田歌子女史)……………………報知新聞一月中

◉女さまぐ〵物語(咲耳坊)……………………讀賣新聞一月廿三日

◉婦人の海外出稼を自由にすべし……………………時事新報一月廿七日

◉日本男子　品行を如何せん……………………同　一月廿九日

◉女子教育と耶蘇教……………………中央會論第十四年第一號

◉矢島楫子君を訪ふ(嶺南生)……………………基督教新聞第八百六號

時報

◎學事

●横濱女學校の設立認可　横濱在戶大町戶部二十五番地中村正義氏より其筋へ出願せし私立横濱女學校設立の件は、愈よ去る廿六日付を以て認可となりたるが、今其設計を聞くに校舍は同市日之出町二丁目四十一番地に建設し、生徒は二百名を限り入學せしめ普通科二年、高等科一年都合三年を以て卒業し得る方法にして學科は裁縫、修身、家政、算術、作文、習字、教育學等とし、別科には刺繡、編物、音樂及び茶の湯、生花、英語等をも學ばしむる筈にて、校長一人(男子)の外四名の女教師をして授業せしむる由。

●東京府師範學校女子部新設計畫　小石川區竹早町なる東京府師範學校は、早晩他に移轉すべき筈にて、前年來より、敷地撿定に議論あるなるが、いよく\〵地を得て移轉したるそののちは、現今の校舍を以て、女子部に就て女教員を養成する計畫の由なり。

●高等女學校令の發布　兼て文部省にて調査中なりし高等女學校令は、此程法制局の審査を終り、目下上奏中にて、四月一日より施行せらるべき高等女學校令は、全部廿餘條より成り、其令の槪要は、沖繩縣を除くの外、北海道及各府縣に設置せしむべき筈にて其校數は土地の情況に依り、地方長官之を述め、教科書も文部大臣の撿定を經たるものに就き、地方長官之を定め、其修業年限は四年となし、土地の情況に依り、一年間を伸縮するを得せしめ、且つ卒業生の爲に修業二年以內の補習科を置き入學資格は年齡十二年以上高等小學校二學年の課程を終りたるもの又同等の學力あるもの等なりといひ、其設置するには、地方長官より文部大臣に稟議の上に於てする手續なりといふ。而して同令發布は二月三四日の中に發布せらるゝ筈なり。(本誌〆切後同令の發布を見る)

●共立女子職業學校の法人登記　共立女子職業學校は一月二十日法人登記を經たり、事務所神田一ッ橋通町二十二番地、目的女子に適應せる技藝職業並に必要なる學科を授くるを以て目的とす、資產の總額金三萬七千二百九十五圓三十三錢、理事の氏名手島精一、中川謙二郞、宮川保全の三氏なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●小倉高等女學校郡立に決す　小倉高等女學校を新設するにつき、一月廿五日の企救郡會にて、愈々郡に引受け、郡立となす事に決し、全校舍新築は本年度内に落成すべき見込にて、敷地は當分六百坪となし、直に建築に着手する筈なりと云

◎會　合

●女子教育會　島根縣邇摩郡大森村尋常高等小學校に於て、一月十五日邇摩郡女子教育會第七回を開けり郡長富田貫氏も病を冒して臨席し熱心に女子教育に關する談話をなし、郡視學田村與之助氏は女子尋常科卒業後の成蹟女生徒の容儀等に就き、郡內各小學校に於ける事實上より注意を述べ、協議題五件を議決し終りに會長田川秀子の案出に係る福引を爲し、午後五時閉會せりと。

●佐賀縣婦人淑友會　なるもの起り、一月二十九日其發會式及び總會を開きたり

●婦人老人會　婦人老人會は明治二十一年十一月廿八日、寺尾理學博士の北堂寺尾愛子氏の宅にて、二三の老婦人打寄り、第一會を催ふし、婦人花見會と名け、爾來毎月一回、會員の家に集まり、會費三錢つゝ投じ、手輕き茶菓をしたゝめつゝ、且つ集る毎に、状袋を貼り抔して、其の賃上金を孤兒院に寄附したることゝなりしが、此の花見會は、次第に生長し、追々加入者も增加したれば、今は會費も五錢つゝとなし。且つ餘りに多人數にて、其場にて仕事をなすは、混雜なれは、豫じめ金錢なり、品物なり、會員の手にて調へ置き、會毎に持ち寄ることゝはなし、而して其の金品を岡山孤兒院、那須曉星園、王子孤女學院等に寄附し、且つは會員相互の吉凶禍福に就て、それぞれ見舞をなし、或は其の集りには然る可き教師抔を請ふて、其の談話を聽き抔し、今や其會員も四十名に近くなりたり、現に一月中赤阪なる或る會員の宅にて、集會ありしに、打ちつどふもの殆んど三十名、其の年齡を合すれば、一千八九百歲の間なる可かりき。今ま其の規則なるものを見るに左の如し。

一、本會は婦人老人會と稱す
一、本會の目的は互に親しみて何事も相助け且つ慈善事業其他社會に有益なるべき事業に應分の扶助をなすにあり
一、何人にても會員たるを得
一、會員は月々會費として若干錢を納む可し
一、毎月一回有志の會員は會員の宅に集會を開く
一、八十歲の會員には會より適宜の祝をなす可し
一、會員にして病にかゝりしものある時は各區に一人の見舞委員を置き患者に何かと心をつくる事（國民新聞）

●三陸海嘯罹災婦人會　仙臺市の婦人池田かう子といへるは、前號の如き會合を組織して、災死者の永久供養の爲回向院を建立することを主唱し、一昨年より其運動に從事せり、其會の規則は左の如し

第二條　本會は明治二十九年六月十五日（陰曆五月五日）陸前、陸中、陸奧の三國大海嘯の際死亡せし者を永久供養せんが爲め回向院を建立するを以て目的とす

第三條　本會の事務を處理する爲め本部を仙臺市に置き漸時支部を町村に設置す

第五條　通常會員は金二拾錢乃至拾三錢を入會申込と同時に最寄の事務所へ納むるものとす
　但し被害地の入會者は半額とす

第六條　本會の趣旨を贊し金一圓以上納むる者若しくは各寺院の僧侶にして此擧を贊する者を以て特別員とす

第十一條　本會の目的たる回向院建立及び之れが永久維持方法の確定と同時に本會を解散す

第十二條　回向院建立地は總會に於て決定すべしと云へども及ぶべきだけ入會者多數なる地に建立すべし

◎人　事

●孝貞　福井縣関留吉の妻ヤイ嫁後舅中風症に罹り、起居飲食自由ならざるを看護し、傍ら五人の子女を撫育し、又夫は稼業の爲め常に家に在る稀れなるを以て、獨り家政に任ずノ事十三年知縣金五圓を賜ひ其孝貞を賞す。

●貞婦の譽　福島縣安達郡太村大字上太田亡熊谷傳右衛門妻はつ、廿餘年間貞操を全ふしたる廉にて、昨年金三圓五十錢を知事より賞賜せられ、其後京都婦人會よりも寫眞を所望せられたる由なるが、今又松山市十善會員より慰問狀に金一圓を添へて贈り越せりと。

●養老の古地孝貞の賢婦在り　岐阜縣養老郡一之瀨村三十九番戶小寺文五郎の母フクは、篤行を以て此程縣知事より賞與を得たるが、同人は當年三十四才にして同村の後藤瀨兵衛の長女なり、素より教育なけれども、天性篤實にして、幼より祖父父母に孝養を盡し、二十二才にして、文五郎の父角治に嫁して、舅姑に奉仕すること篤く、夫は二十五年に死去したる後は、生計甚だ困難なるに堪へて、七十六才の舅に仕へ、子は小學校に送りて教育し、今日まで曾て人の救助を受けたることなく郷黨みな其善行を稱する處なりといふ。（國民新聞に據る）

●女子の鑑　德川三卿の末葉の身を以て、醉漢取財の罪を犯して拘禁せられ、華族の禮遇を停止せられたる德川篤守伯夫人とよ子氏は、伯爵小笠原忠忱氏の妹にして、夫に仕ふる貞實なりしに、數年前、兄伯及び親戚の退引ならぬ意見に從ひて、五人の子女を殘して、實家に歸りしが、殘る一家は、父の放埒なるが爲に日々の食事にも事欠く悲しき境遇に陷りしが、中に今年十八才なる芳子といへるは日々早稻田の邸より華族女學校に通學するに、涙の中にも、勉學に餘念なく、校中の逸物なりしが、此頃父の拘禁の前に、早稻田の邸は人手に渡りて、この可憐なる少女の住家はいま何處、人は小石川服部坂邊なりともいふ。（万朝報一月廿日に據る）

●貞節と友誼　秋田市の士族原田其之助の貧苦なるをば、劍客國安兵馬氏を以て之を助け、妻コノは有名なる儒者黑澤氏の妹にして、本年五十七才、貞節を以て聞ゆ。先頃夫死するや國安氏、之を助けて葬をなすを得せしめたり。（秋田魁新聞に據る）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

著作預告

巖本善治 編

海舟餘波（近刊）

海舟先生の言を立るや、機に應じ、人に對す、波瀾万狀なり。先生の事を遂るや、出沒時なし、深く晦藏して痕跡を見せず。喩えば、水の如く、譬へば、舊波の如し。脫兎を忘れて、舊株を守り、藥糟を嚙んで、生氣を思はざる、迂にあらずして何ぞ。故に、先生の評傳豈に一日にして一人の能く爲す所ならんや。世上幾多の著作あらんとする頗る佳なりと云ふ可し。余や不敏、たゞ自から聞き自ら見る所を告げて天下の知人に分たん。多年聞く所のもの悉皆筆記して、悉く存す。將に其の可なるものより順次に出版して世に献ぜんと欲する也。

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝこと數十回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化す。德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行總て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から感化せらるゝことを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可からず、婦女老人亦讀まざる可からず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙なる以て亦た一時に喧傳す　森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄つ能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し　知人愛惜の情を寄せらるゝこと切なり。即ち茲に其遺稿を收め、女子が一周忌日に合して前後二篇を合せ刊行せしめたり。其友湘煙中島女史は序を題し、郷友松井昇氏は挿畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巣鴨村庚申塚　女學雜誌社

故若松賤子英文集

巖本嘉志子

一冊正價金六十錢
郵稅金六錢

小公子の譯者故若松賤子の英文述作に於けるや、筆路頗る流麗なるを以て稱せらる。今此書は即ち女史が英文廿一篇を收めたるものにして、加ふるに女史の師友ブース氏及其他內外知友記する處の女史の小傳追憶記等を以てし、また女史の肖像を揭く。蓋し以て內外家庭の閑暇の友となすべく、又以て尋常中學高等女學校等の英語教科書となすに甚好なりとす。

發賣所　東京巣鴨村庚申塚　女學雜誌社

『巖本嘉志子』に對する批評

故若松女史が紀念にと、女史が英文の遺稿を集めて、其內外の知己及び良人巖本氏の發行せしものなり。その文字の簡明にして好く選ばれたる、高雅にして然かもなづまざる、流麗清新の文まことに Queen's English の純なるものに恥ぢず。神田氏、頭本氏など今の英文士として知られたる人々の筆に成るものより、遙に自然にして生々したる心地す。吾本國の女流と雖も、此文を成すもの蓋し少しとするに足るべきか。孤女學院を訪ふの記の最初のあたり、少しく日本人が詩的形容の流弊に失したる感あれど、皇后陛下、皇太子殿下の御事を記したる、文字などめでたく覺ゆ。この方行末と題せる終りの一文、又一つの書簡に函館難船の事を記せるもの最も筆力を見る。女子教育と基督新教とは最も深く女史が心に印せし如くに思はる。この有樣にして、清新の思想を抱くの女史、早く故人となりて、この遺集をなす、これを惜しむもの、豈に其知己朋友のみならんや。

（文學界第四十七號、明治二十九年十一月三十日）

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY